

令和4年度 文化庁 日本語教育人材の研修プログラム普及事業

日本語学習支援者に対する研修報告

| | |
|--------|-----------------------------|
| 実施機関名 | 特定非営利活動法人 国際活動市民中心 |
| 事業名 | CINGA日本語学習支援者研修プログラム普及事業 |
| 研修実施地域 | 北海道・東北／南関東／北関東・甲信／九州・沖縄ブロック |
| 事業実施期間 | 令和4年5月～令和5年3月 |
| 研修受講者数 | 51名 |

1. 事業実施機関概要
2. 事業概要（目的・取組・実施体制）
3. 研修の実施 取組 b)
 - 3.1. 研修の目的・ねらい・特徴（山梨県）
 - 3.2. 求められる資質・能力と研修における教育内容の関係
 - 3.3. 研修概要（実施スケジュール・教育内容・教育方法）
 - 3.4. 研修実施体制
 - 3.5. 募集・選考・受講者・修了者の情報
 - 3.6. 研修の様子
 - 3.7. 研修前後のフォローアップ体制（学びを深めるサポート等）
 - 3.8. 評価
4. 研修講師・コーディネーターの育成 取組 c)
 - 4.1 研修講師・コーディネーターの育成 概要プログラム
 - 4.2 評価 参加者による評価
評価委員による評価

5. 過年度の研修実施地域とのフォローアップ研究会と全国関係者への報告会の実施 取組 d)

5.1. フォロアアップ研究会と報告会 1

5.1.1. フォローアップ研究会の目的・ねらい・特徴

5.1.2. フォローアップ研究会 概要

5.1.3. フォローアップ研究会 実施体制

5.1.4. フォローアップ研究会の様子

5.1.5. 報告会 1 の実施 概要

5.1.6. 報告会 1 の様子

5.1.7. フォローアップ研究会と報告会 1 の評価

5.2. 報告会 2

5.2.1. 報告会 2 の実施概要

5.2.2. 報告会 2 の様子

5.2.3. 報告会 2 の評価

6. 事業評価 取組 e)

6.1. 事業評価概要（評価の観点及び検証方法、検証結果）

7. 成果と課題

8. 3年間の事業をとおして見えたこと

1. 事業実施機関概要

1. 事業実施機関概要

特定非営利活動法人 国際活動市民中心 Citizen's Network for Global Activities (CINGA)

【特徴】

- ・外国人の支援を行う専門家のネットワーク組織
- ・支援者を支える中間支援・コーディネート組織
弁護士、行政書士、心の相談、労働相談、社会福祉士、社会保険労務士、通訳者、日本語教師、メディア関係者、協会職員などが専門性を活かして市民活動を行っている。

<https://www.cinga.or.jp/> 2004年設立、会員数47名

【理念】

- ・この法人は、日本で暮らす外国人住民に対して日本語学習や相談を受けるといった支援事業を市民活動として行うことにより、外国人にとって住みやすい日本社会構築をめざすとともに、日本人市民の多文化共生意識を醸成することを目的とする。

【主な事業】

- ・東京出入国在留管理局主管 外国人総合相談支援センター／東京開業ワンストップセンター
- ・外国人技能実習機構母国語相談センター運営
- ・無料多言語専門家相談事業
- ・文化庁 日本語教育人材の研修カリキュラム開発事業
- ・文化庁 「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

2. 事業概要

2. 事業概要

【目的】

本事業の目的は、多文化共生社会の形成を目的として日本語学習支援を行う市民を育成する研修を整備・実施することである。本研修は、その目的を達成するために、受講者に以下の3つの気づきをもたらすことを目標として行われる。

- 1) 他者理解のために、個の文化、新たに作り出される文化など、文化のさまざまな側面に気づくこと
- 2) 言語調整能力を上げることの大切さに気づくこと
- 3) 相手のことばを受容することの大切さに気づくこと

日常生活の中で、市民が外国人と出会う場面は多様である。本研修に参加した人々がこの多様な場面において、この3つの気づきや視点をもって相互理解のためのコミュニケーションができるようになることを目指す。そして、多様な人が集い、相互学習を重ねていく市民活動の場である日本語教室においては、実効性のあるコミュニケーション支援ができるようになることを目指す。

同時に、対象地域の担当者やコーディネーターが本プログラムをその地の社会状況に最適化させて実施する力を育成することにより、多文化共生のまちづくりに資する持続可能な日本語学習支援者育成の仕組み構築を図る。コーディネーターや研修講師の人材育成においては、カリキュラム開発事業で研修設計・実施プロセスを共有してきた委員会メンバーのチームワーク、および、全国の自治体や国際交流協会に足を運んで中間支援をおこなってきたCINGAのネットワークとコーディネート力を強みとして、実施地域の中核人材に伴走する。

2. 事業概要

【取組の概要】

a) 研修体制・方法等の検討

CINGAコーディネーターが実施地域の現状や課題を把握し、検討委員会にて研修の内容と方法を検討、評価、改善した。

b) 研修プログラムの実施

研修は山梨県において4つの市町を対象にオンラインにて実施された。受講者は、研修後に各市町で開催される対面の日本語教室への参加が前提となっていた。

c) 研修講師・コーディネーターの育成

山梨県の研修講師候補者、地域日本語教育コーディネーター、研修アドバイザーが参加する実践研究コミュニティを形成し、全4回、カリキュラムについての研究会を行った。また、現地の地域日本語教育コーディネーターを中心に講師陣と実践コミュニティをつくり、各回の内容作成等、研修実施の準備を行った。

d) その他の取組 過年度の研修実施地域とのフォローアップ研究会と全国関係者への報告会の実施

- ① R2,3事業参加地域（茨城県、札幌市、長崎県、千葉県）のコーディネーター等、実施関係者の力量形成のため、省察を目的とする研究会を2回行い、報告会実施につなげた。研修アドバイザーが一人ずつ各地域を担当し、報告会発表に向けて支援を行った。
- ② 3か年の事業について、2つの報告会を実施した。報告会1では、各地域における研修事業の変容などについて、①に参加した4地域関係者が登壇し報告した。報告会2は対面で行い、3年間の事業の報告に続いて参加者全員で「これからの地域日本語教育」についてディスカッションした。

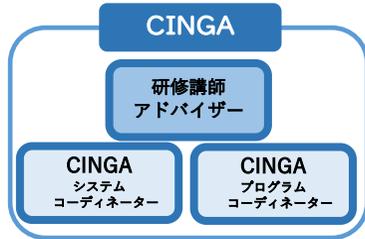
e) 事業評価

- 1) 研修実施地コーディネーター 2) CINGAシステム・プログラムコーディネーター 3) 検討委員兼評価委員、
- 4) 外部評価委員 という4層による事業評価を行った。

2. 事業概要

【図】

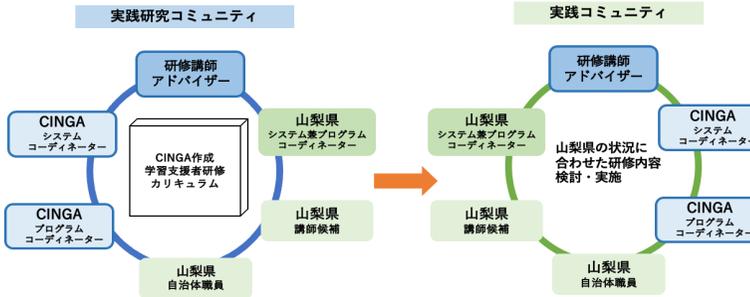
a) 研修体制・方法等の検討



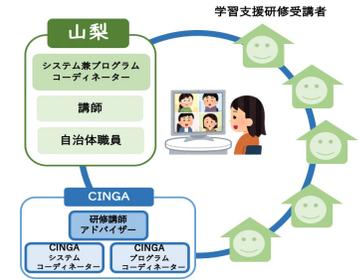
e) 事業評価



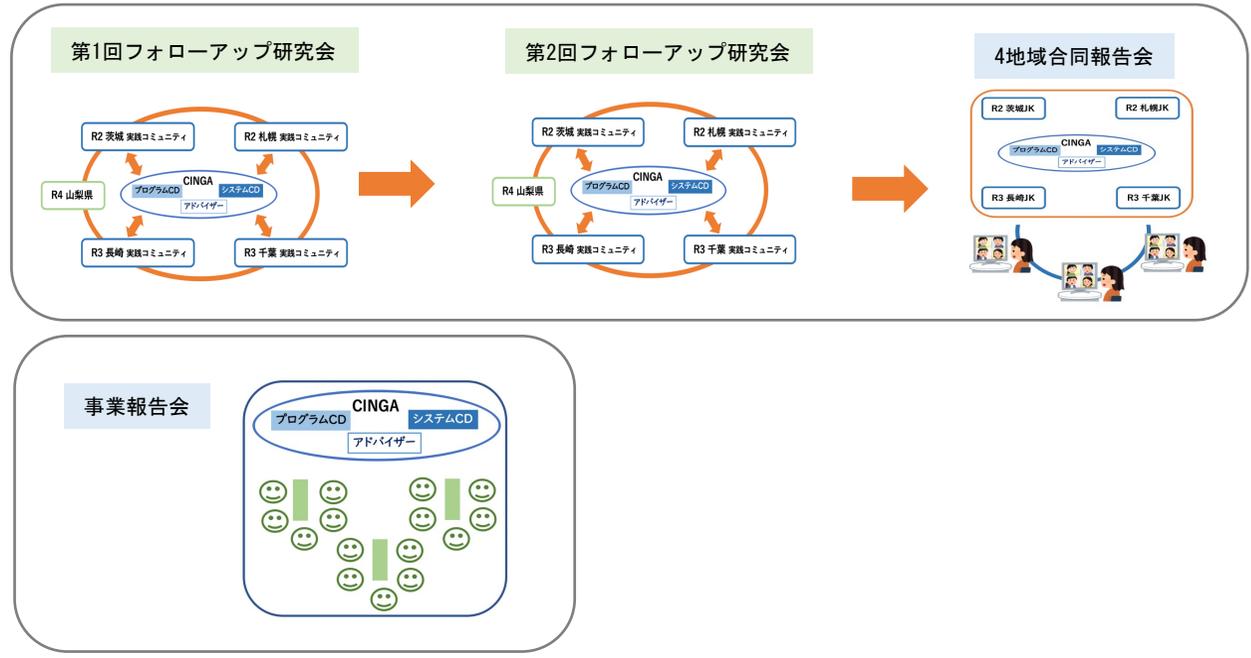
c) 研修講師・コーディネーターの育成



b) 研修プログラムの実施



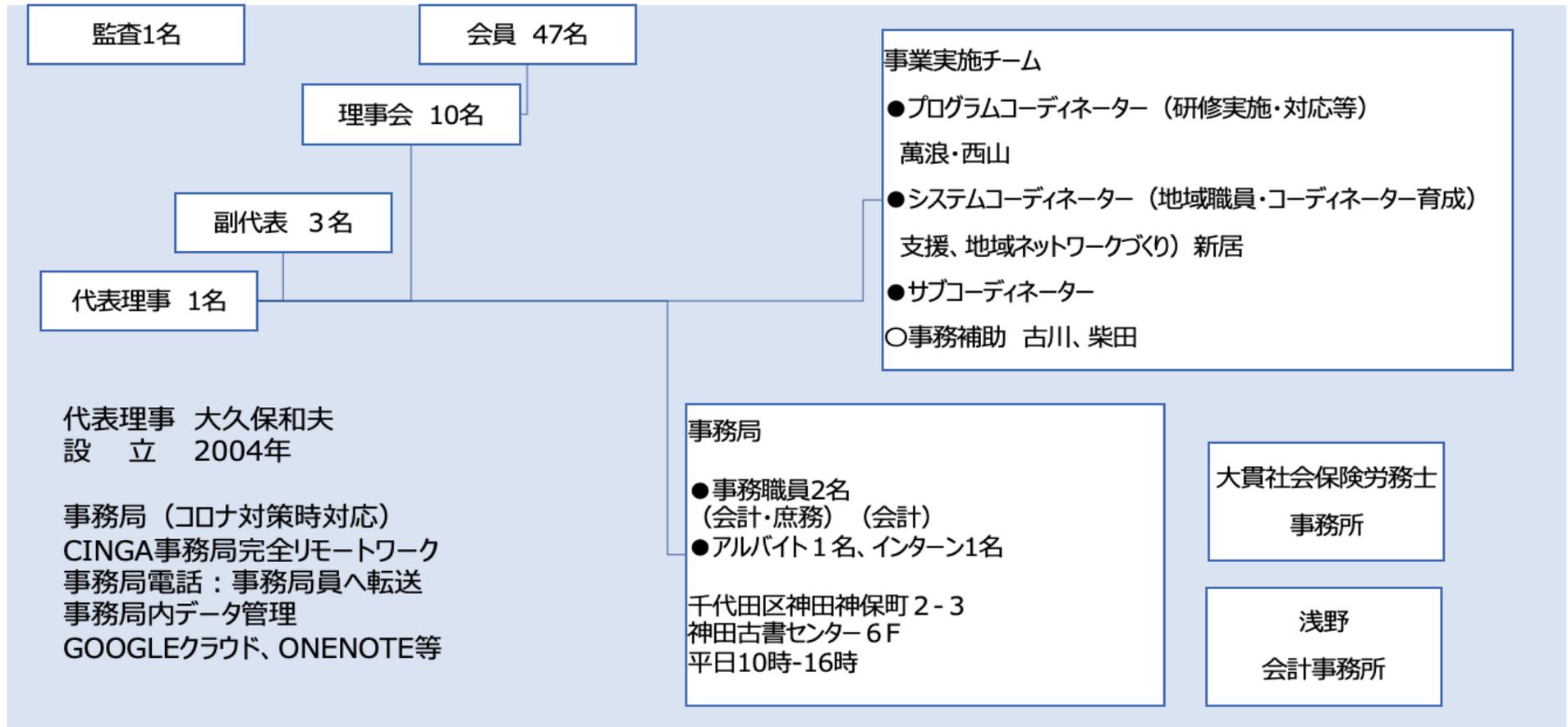
d) その他の取組_過年度の研修実施地域とのフォローアップ研究会と 全国関係者への報告会の実施



2. 事業概要

【事業全体の実施体制】

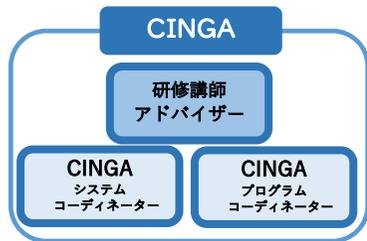
2022年度事業全体の事務体制



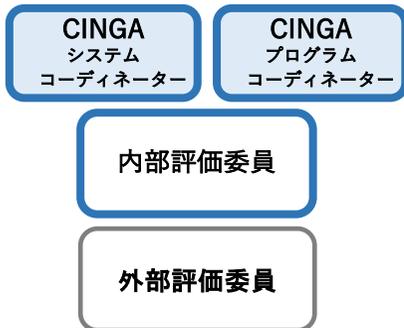
3. 研修の実施

取組 b) 研修プログラムの実施

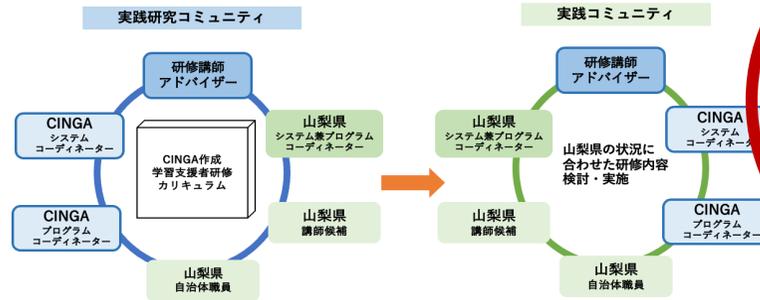
a) 研修体制・方法等の検討



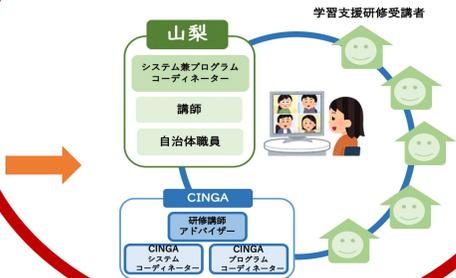
e) 事業評価



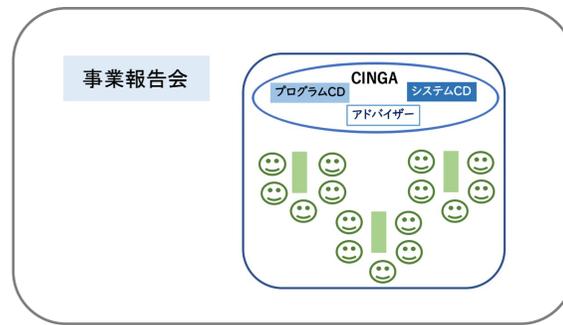
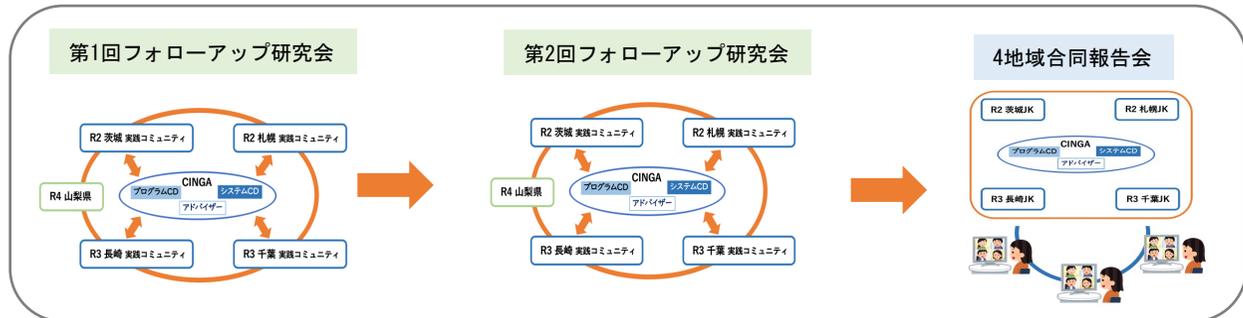
c) 研修講師・コーディネーターの育成



b) 研修プログラムの実施



d) その他の取組_ 過年度の研修実施地域とのフォローアップ研究会と全国関係者への報告会の実施



3.1. 研修の目的・ねらい・特徴(山梨県)

1) 目的

- ・ 山梨県地域日本語教室の目指す方向を共有し、パートナー※1としての役割を理解する
- ・ パートナー活動（対話・協働活動）を行うための知識、技術、態度を身につける
- ・ 「平和、公平、共生の社会」の実現に向けて県民の意識醸成と行動変容を促す

2) 特徴

- ・ 文化庁「CINGA日本語学習支援者研修プログラム普及事業」（NPO法人CINGA）活用
- ・ 令和4年度日本語モデル教室と文化庁「地域日本語教育の総合的な体制づくり事業」間接補助利用日本語教室で活動予定のパートナーを対象とした研修

※1 山梨県地域日本語教育推進事業におけるパートナーとは

本県の地域日本語教育推進事業においては「日本語学習支援者」（文化庁）をパートナーと呼ぶ。パートナーは教室開催市町村に在住する地域住民を主な対象者として募集。日本語を教える役割を持つ人ではなく、同じ市民として対等な立場で、参加者全員が“個”として付き合うことをベースに教室で対話・協働活動を行う人。

3.2. 求められる資質・能力と研修における教育内容の関係

研修会では右図上段の項目を学び、考えることで日本語学習支援者に必要とされる知識を得た。また、参加者同士の学び合いや外国人協力者の参加による実践体験を通じて求められる技能を、研修全体の教育や参加者同士の対話を通じて求められる態度を育んだ。

日本語学習支援者に求められる資質・能力は、右図のようにカテゴリーごとにわかりやすい用語に置き換え、学習項目とした。



3.3. 研修概要（実施スケジュール・教育内容・教育方法）

1) 研修の構造

「CINGA日本語学習支援者に対する研修カリキュラム教材」を参考に作成。

研修は下図の組み立てで実施した。

 … 該当回での主な学習内容
 … 該当回以前の学習内容とのつながり

研修の構造（山梨2022）

| 日程 | テーマ・担当 | 研修の構造 | | | |
|--------------|---|------------------|------|--|---|
| 第1回 8月20日 | 山梨県の体制づくり紹介 学習者の背景 多文化共生 異文化理解 | ①学習者の背景に関する理解 | | | |
| 第2回 8月27日 | コミュニケーション教育 | ②多文化共生 ④異文化理解 | のための | ⑦コミュニケーション教育 ③コミュニケーションストラテジー | |
| 第3回 9月3日 | 相互理解と学習支援のための コミュニケーション | ②多文化共生 ④異文化理解 | のための | ⑦コミュニケーション教育 ③コミュニケーションストラテジー | を体験する ⑥日本語学習支援(aコミュニケーションスキル) ⑥日本語学習支援(c対話型、OJT) ⑧日本語の構造 |
| 第4回 9月10日 | 地域日本語教室の多様性 ※ゲストを招き他地域の実践 紹介 | ②多文化共生 ④異文化理解 | のための | ③コミュニケーションストラテジー ⑥日本語学習支援(aコミュニケーションスキル) | を活かして行う ⑤地域日本語教育の多様性 ⑥日本語学習支援(b活動の流れ) |
| 第5回 9月17日 | 私たちの活動を考える | ②多文化共生 ④異文化理解 | のための | ①学習者の背景に関する理解 ③コミュニケーションストラテジー ⑥日本語学習支援(aコミュニケーションスキル) ⑦コミュニケーション教育 | を用い ⑤地域日本語教育の多様性 を活かして考える ⑥日本語学習支援(c対話型、OJT) |

2) 教育方法

講義及びグループワーク

3) 実施内容、実施スケジュール

山梨県地域日本語教室 パートナー研修会

～対話で知り合う“あなたとわたし”～

日時

2022年8月20日, 27日, 9月3日, 10日, 17日
(土) 13:00-16:00

参加方法

オンライン(Web会議システムZOOMを利用)

※インターネット環境、パソコンやタブレットをご用意ください。カメラ、マイク機能が必要となりますのでお使いの機材を事前にご確認ください。

様々な国籍の人とともに暮らす多文化社会において私たちが大切にすべき視点とは何でしょうか。また、多文化社会を生きる私たちができることとは何でしょうか。

「教える教わる関係性ではない、日本人、〇〇人で区別しない」 — “個”として相互に知り合い、語り合うのがパートナーの皆さんの役割です。教室は参加者全員がわたしらしさを見つける場、安心して自分を表現できる場、自分たちの地域をつくり続ける場。そのような場を目指し、皆さんとともに考え学び合う研修会です。

◆ZOOM接続お試し会◆ 8月14日(日) 15:00～



※接続やZOOM操作が不安な方はご参加ください

【注意事項】
本研修は文化庁「CINGA日本語学習支援者研修プログラム普及事業」の研修を山梨県において実施するものです。研修では、カリキュラム改善を目的として、講座の様子を録音、録画する場合があります。また、研修内でのアンケートや振り返りデータを使わせていただきます。データは個人が特定されない形で文化庁に提出するとともに、研究会等での発表に使用する可能性があります。ご理解、ご了承の上、ご参加くださいますようお願いいたします。


YAMANASHI


CINGA

山梨県地域日本語教育推進事業
令和4年度文化庁「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」活用

【問合せ】学校法人ユニタス日本語学校 古屋 (山梨県総合地域日本語教育コーディネーター)
furuayo@unitas-ej.com ☎070-3343-7444

研修内容

8月20日(土)
第1回

「わたしたちのやまなしを知る

～多様な人々がともに暮らす地域づくりに向けて～

山梨県内には多様な言語・文化を持つ方が生活しています。多様な人々がともに暮らす地域づくりに向けて大切なことは何でしょうか。学習者、パートナーの背景にある社会状況を知るとともに「文化」「文化理解」「多文化共生」の捉え方を体験から考えます。
金丸 巧(山梨学院大学グローバルラーニングセンター特任准教授)

8月27日(土)
第2回

「多様な人とのコミュニケーションを考える

～待つ・聴く・対話する～

私たちの地域にきた様々な背景を持つ外国人の方どのようにコミュニケーションをとったら「同じ市民」としてつながることができるでしょうか。シアターワークを取り入れたワークショップを行い「聴く・待つ」を体験しながら、外国人とどのように向き合い、耳を傾け、対話するか考えます。
中山 由佳(山梨学院大学グローバルラーニングセンター特任准教授)

9月3日(土)
第3回

「やさしい日本語ではなそう

～あなたとわたしをつなぐことばの実践～

やさしい日本語とは、どんなことばでしょうか。ふだん使っている日本語をやさしい日本語にかえるためのポイントを学び、相互理解を回す対話に必要な相手に合わせた日本語の話し方を一緒に考えます。
小林 信子(ユニタス日本語学校非常勤講師、甲府市日本語・日本文化講座講師
山梨外国人 인권 ネットワーク・オアシス所属)

9月10日(土)
第4回

「地域日本語教室とパートナーの役割

～わたしらしさを見つめて～

多様な人々が集まる地域日本語教室の在りようは様々です。今回の研修では山梨県内外の日本語教室で行われている実践の様子を見ながら、「わたしらしい」かわり方を探ります。自分らしさを活かした活動とは？地域における日本語教室の意義とは？皆さんで考えていきましょう。
古屋 玲子(山梨県総合地域日本語教育コーディネーター、ユニタス日本語学校講師)

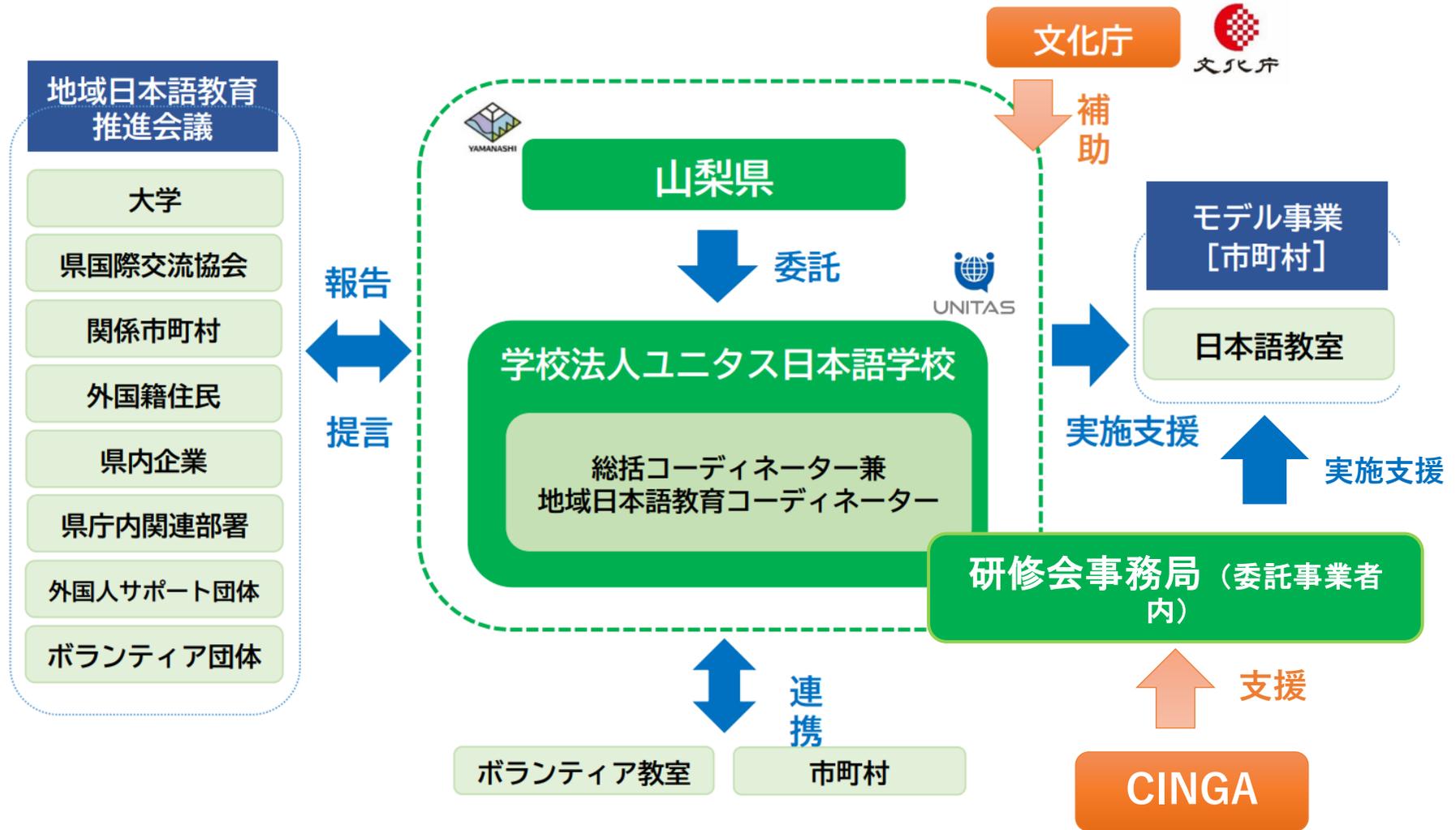
9月17日(土)
第5回

「様々な人々がともに暮らす地域づくりのために
私たちができること」

多様な人々がともに暮らす、多文化共生の地域づくりのためにできることは何でしょうか。最終回の研修では、これまでの研修で考えてきたことをいかしながら、理想の地域像を目指して、私たちがだからこそできるパートナー活動を考えます。
金丸 巧(山梨学院大学グローバルラーニングセンター特任准教授)

3.4. 研修実施体制

「地域日本語教育の総合的な体制づくり事業」内において実施



3.5. 募集・選考・受講者・修了者の情報

| | 大月市 | 南アルプス市 | 笛吹市 | 北杜市 |
|---------|---|--------|-----|-----|
| 募集期間 | 2022年7月1日～29日 | | | |
| 募集方法・媒体 | 市広報、市SNS、ホームページ(県、市) ちらし設置(市役所、市内公共施設、県国際交流協会) | | | |
| 応募条件 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本語教室開催市町村及び近隣市町村に在住・在勤の方 ・年齢、国籍、経験問わず興味がある方は誰でも可、語学能力不要 ・5回の研修に参加できる方 | | | |
| 選考 | なし | | | |
| 応募者数 | 15名 | 6名 | 16名 | 16名 |
| 修了者数 | 14名 | 5名 | 14名 | 13名 |
| 修了要件 | なし。 (参加者自身の都合やICT環境不備等でキャンセルを申し出た者を除く 全員を修了者とした) | | | |

3.6. 研修の様子

全5回をオンラインで実施した。参加者同士が互いの考えや感じたことを話し合いながら、ともに学び合う参加型実践研修会で〈学び合い⇔自己省察⇔実生活での実践〉を繰り返し考えを深めていった。

【研修会レジюме受信】 → 【研修会(オンライン)】 → 【ふりかえりと自分への課題設定を送付】



【全参加者ふりかえりコメント受信】



【自分への課題を意識して生活】



(参加者の研修期間イメージ)

3.7. 研修前後のフォローアップ体制（学びを深めるサポート等）

研修前

オンラインサポート〈ソフトインストール、操作〉
（接続お試し会（一斉実施）、個別サポート）

研修当日

接続不良、操作方法サポート

研修期間

ふりかえりコメント回収まとめ、送付

教室実践期間

教室前後のミーティングで疑問点、不安点の話し合い
教室参加者の様子を共有し方向性の再確認
祭りにおいて日本語教室ミニイベント実施

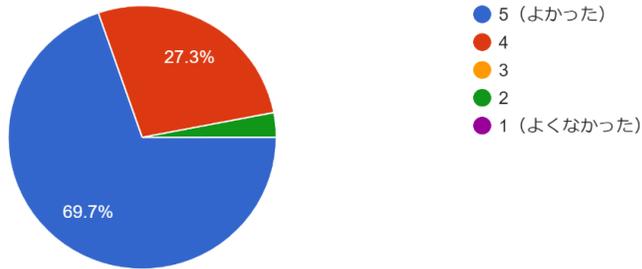
教室期間終了後

ふりかえり&つながり会実施（各教室の実践報告共有）

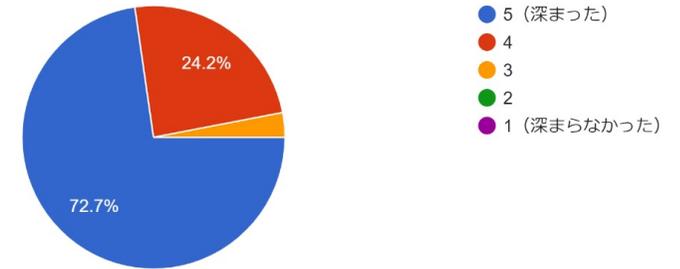
3.8. 評価

1) 参加者修了時アンケートによる定量評価（回答者33名）

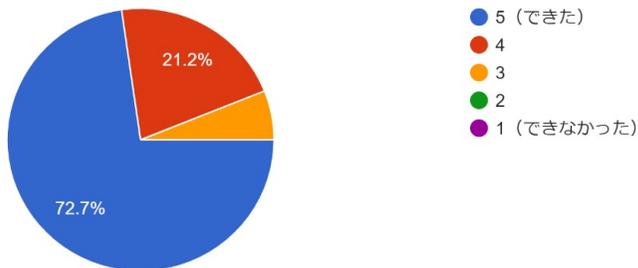
全5回の研修の内容はいかがでしたか。5段階でお答えください。
33件の回答



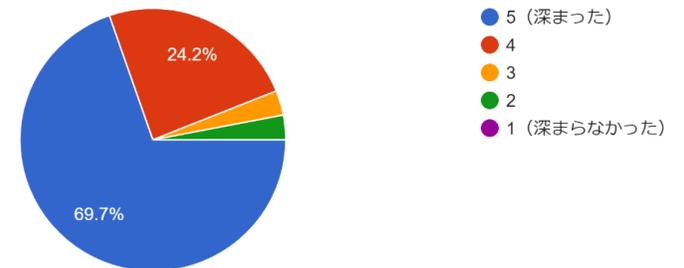
外国人との交流やコミュニケーションについて、考えが深まりましたか。
33件の回答



研修で多文化共生社会における相互理解とパートナーとしての考え方を学ぶことができましたか。
33件の回答

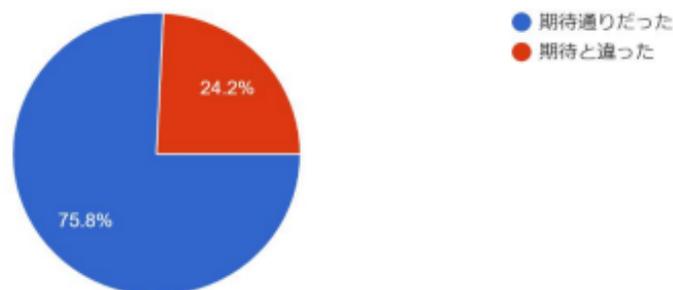


「多文化共生の地域づくり」について、考えが深まりましたか。
33件の回答



受講前の期待に対して、いかがでしたか。

33件の回答



■「期待と違った」と答えた方にお聞きします。何が違いましたか。

良い意味で、参加者が「開明的」。第4回のさぼうと21の矢崎さんの活動とお話がとてもよかったこと。ユニタスのかたがたが大変、献身的に研修を実施されていたこと（国の委託事業をこなすというような感じではなかったこと）。

講義を聴くだけの研修ではなく、他市のパートナーといろいろな対話をして、考えを共有できる場で、とても有意義でした。

山梨、地域等の事を教えるのではなくその地域に寄り添い一緒に学ぶこと。

国の施策だからか、研修内容はかなりハードルが高いと感じたから。

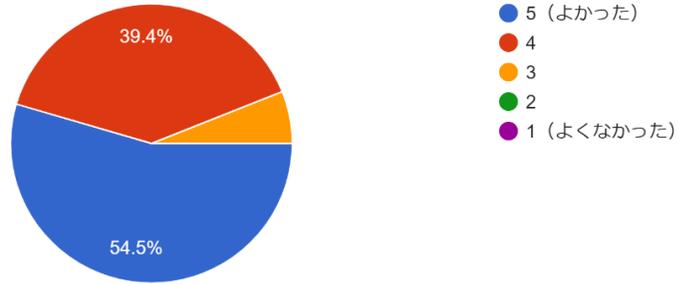
いったい3時間5回もどんな研修をするのだろうかと思っていました。日本語を教えることに対しての研修かと思っていたので、戸惑ったところがあります。でも、多文化共生という意味ではいろいろな気付きがあってよかったと思います。

学習者にパートナーが接する方法や事例を具体的に挙げた学習が中心かと思っていたので、その点が違いました。

第3回の内容のようなことを5回分するのかと思っていたところに、違ったと感じました。

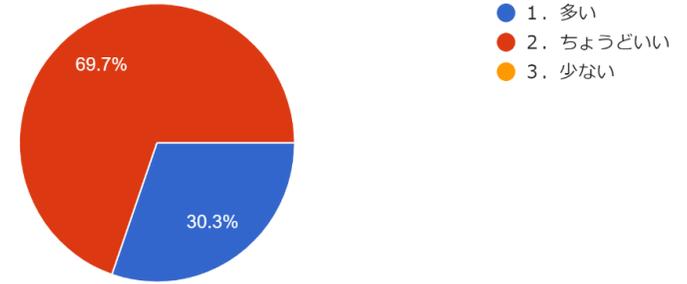
グループワークなどの活動はいかがでしたか。

33件の回答



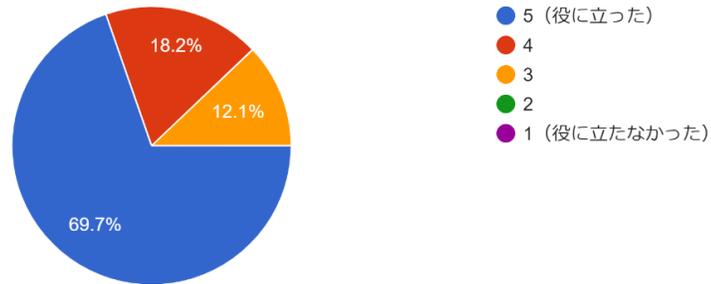
全5回という回数はいかがでしたか。

33件の回答



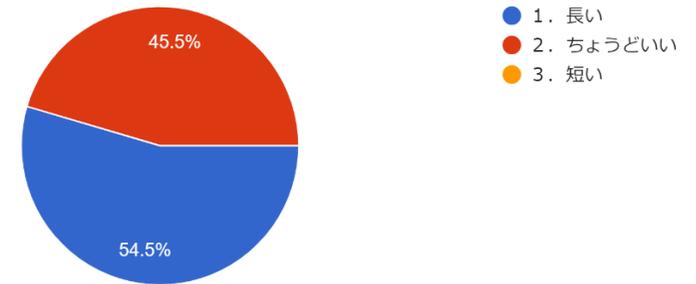
毎回研修の振り返りを書いたり、話したりすることは学びの役に立ちましたか。

33件の回答



1回3時間という時間はいかがでしたか。

33件の回答



2) パートナーのコメントによる定性評価 (R2~4の変遷)

| | 研修会 | 教室後のコメント (自身の気づきや行動変容に関するコメント) |
|------|-----------------------------|---|
| R2年度 | なし | <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションとは話すだけでなく聞く側としての役割の大切さを感じた ・日本語を教えるのは難しい ・抽象的な語彙は教えにくい ・わかりやすいことばで理解してもらうことは難しい |
| R3年度 | 2時間×2回 講義型 ※一部実践型 | <ul style="list-style-type: none"> ・もう少し外国の方にわかるような話し方をしたい ・学習者の楽しそうな様子に自分自身の方が楽しくなつてつい口をはさんでしまうので学習者の話をゆっくり聴くことを心がけたい ・もっと話をさせてあげたいという気持ちになった ・まちで見かける外国の方への見方が変わった。外国の方が困っていたら声をかけてみようと思うようになった |
| R4年度 | 3時間×5回 実践参加型 参加者学び合い型 | <ul style="list-style-type: none"> ・ことばの使い方の選択を意識するようになった ・やさしい日本語、傾聴の研修が教室実践や実生活で役に立った ・様々な方と話すことで自分の世界が広がることを知った ・研修で聞いた「在住外国人は異文化を経験しそれに適応してきた人なので学ぶところがたくさんある」という話があったが、それを教室で何度も体験した ・相手と波長を合わせる、心を合わせて傾聴する機会がもてた ・相手が何を求めて教室に来ているか、それを察知して動くことを意識した ・対等な立場で「対話する」ことを理解できた ・研修を経て参加したので、共生社会を意識して参加できた ・ニュースを見るときに色々な国のことに興味がわくようになった ・外国の方と共に生活するまちとしての意識が高くなった ・市内の情報で外国の方に役にたちそうなものを意識するようになった |

考察：令和3年度以降「教える」ということばが見られなくなった。これは本県における日本語学習支援者の役割が明確になったこと、それを研修で扱ったことの表れであると思われる。令和4年度は言葉の選択だけでなく相手の心の持ちように意識が向くようになったこと、視点が社会に向けられるようになったこと、外国の方は地域とともに住む仲間であるという意識が表れたことが大きな特徴といえる。これにより研修の目的の一つである「相手のことばや文化を尊重し、対等な立場で接する」「住民相互の協力による地域づくり、異なる考えや価値観を持つ他者との協働」ができるパートナーの形成に貢献できた研修であったことがわかった。

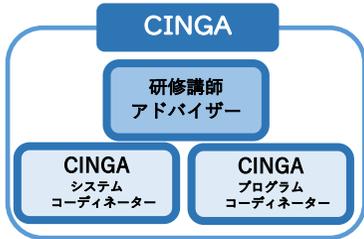
3.8 評価（評価委員コメント）

- 自治体職員を含めた関係者間で、日本語教育事業の意義と各々の役割分担に関する共通認識をもったうえでプログラムを実施できこと。また、研修プログラムが、体制整備事業の中に位置づけられていたこと(出口としての教室があること)の二つが相俟って、研修事業が順調に進んだ。
- 関係者が出会い、語り合い、それぞれの課題を深め合うプロセスをどれだけいねいにつくり出すのか、そしてそのプロセスの中に仲間意識を基礎とした実践コミュニティ・実践研究コミュニティを自ずと生み出していくのか、ということの大切さを関係者間で共有できた。
- 出口が用意されている研修は、研修参加者の研修参加意欲を高めるだけでなく、研修内容を自身の(これからの)教室活動に照らして消化させていくことができるため、効果的である。
- (4地域の受講者がオンライン研修に同時に参加したことが) それぞれの地域の特性等を言語化し、「自地域」を考える機会になった。「わたしの地域」に共に暮らす住民意識、仲間意識が、「まちづくり」につながる大切な要素であるため、それはとても大切なステップである。
- 実践研究コミュニティ、実践コミュニティ、日本語学習支援者研修の3つの取り組みが、相互に関連しつつ、研修担当講師・コーディネーター育成に有効に機能した。

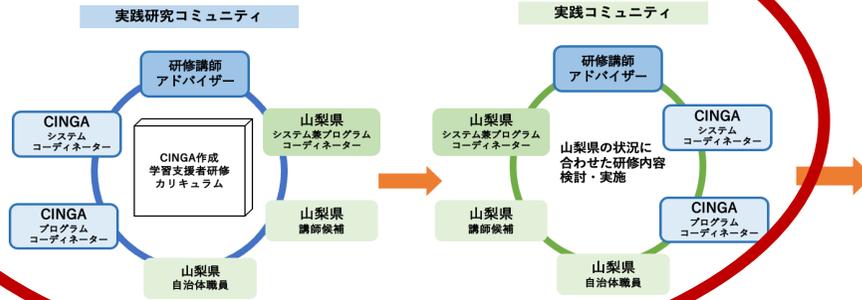
4. 研修講師・コーディネーターの育成

取組 c) 研修講師・コーディネーターの育成

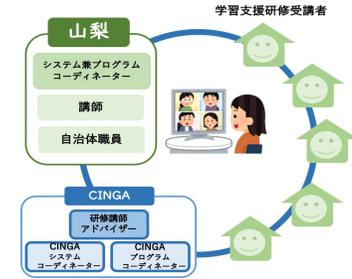
a) 研修体制・方法等の検討



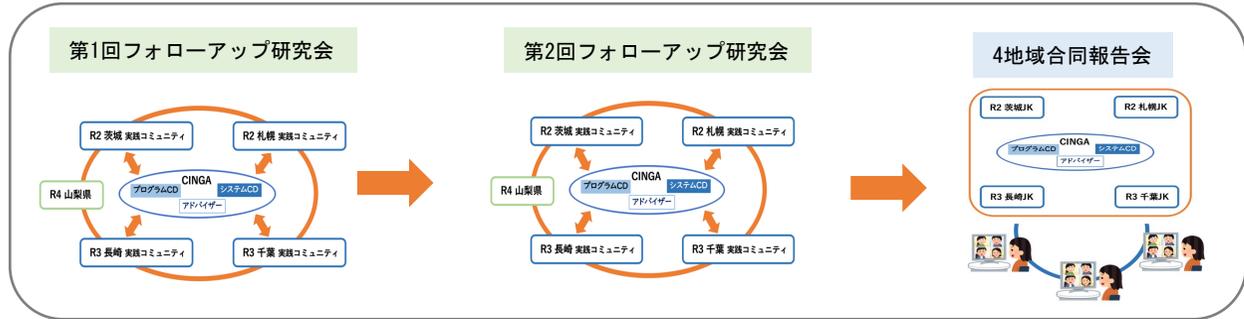
c) 研修講師・コーディネーターの育成



b) 研修プログラムの実施



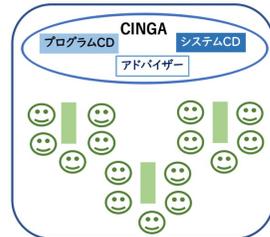
d) その他の取組_過年度の研修実施地域とのフォローアップ研究会と 全国関係者への報告会の実施



e) 事業評価

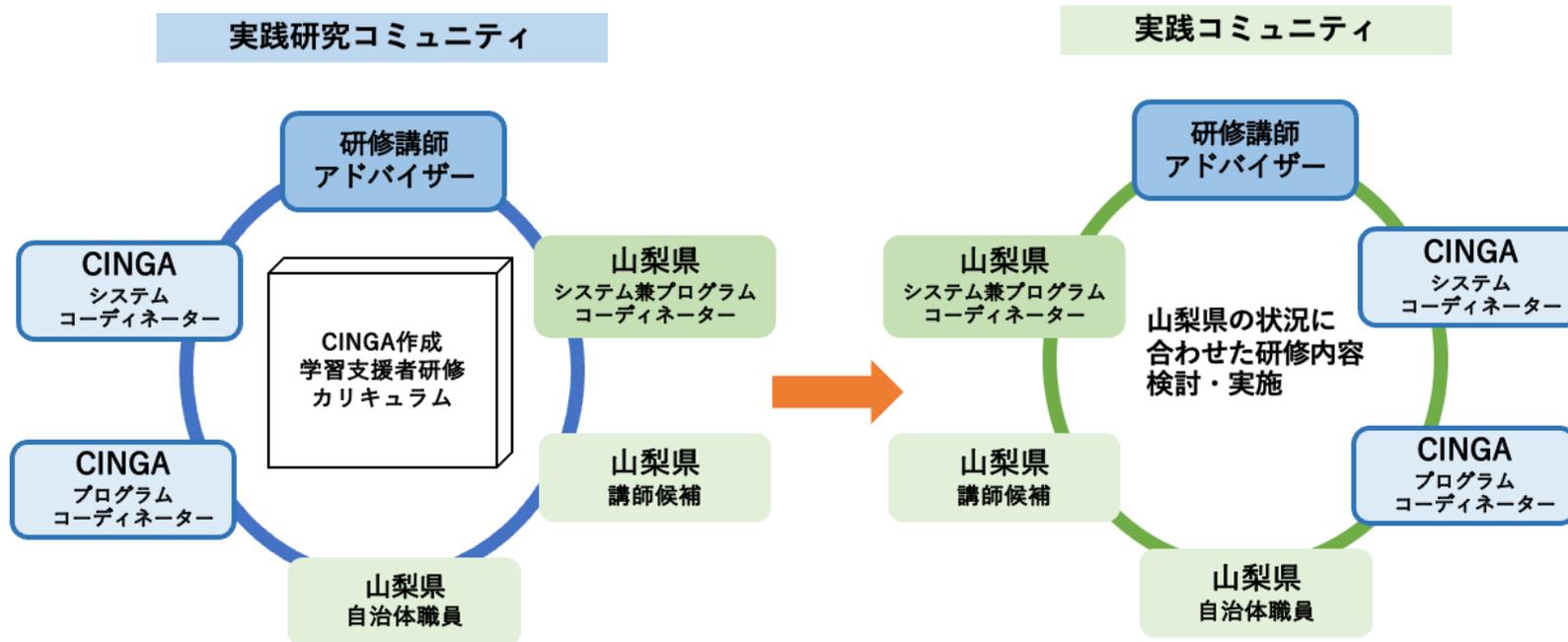


事業報告会



4.1. 研修講師・コーディネーターの育成 概要

目的： 研修実施地において日本語学習支援者研修を担う講師・コーディネーター育成
 募集方法： 山梨県日本語教育体制づくり推進事業関係者や研修アドバイザーによる紹介等



講師候補者を地域関係者からの紹介等で発掘し、全5回の研究会を開催した。日本語学習支援者研修の目的、展開方法、教材に関する議論をとおして、担当課職員、講師候補者、コーディネーターがともに学び、研修実施についての共通理解を深めた。

地域の状況に合わせた研修実施に向けて、研修アドバイザーとCINGAプログラムコーディネーターが地域の状況を踏まえて講師候補者やシステム兼プログラムコーディネーターに対して助言や情報提供等の支援を行った。

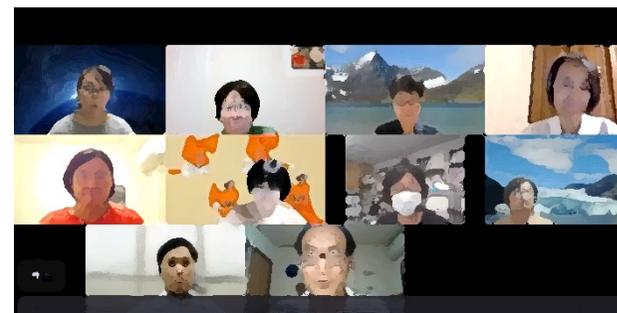
4.1. 研修講師・コーディネーターの育成 概要

実践研究コミュニティ プログラム

| 取組の名称 | | 日本語学習支援者研修担当講師・コーディネーターの育成（山梨研修） | | | | | | |
|-----------|-------------------------|----------------------------------|----|-------------------------------|------|-------------|----------------------|-------|
| 開催場所 | | オンライン | | | | | | |
| 受講者数/応募者数 | | 7人/7人 | | | 修了者数 | | 7人 | |
| 育成の実施内容 | | | | | | | | |
| 回数 | 開講日時 | 方法 | 時間 | 科目名 | 受講者数 | 講師 所属・役職 | | 補助者氏名 |
| | | | | | | 所属・役職 | 氏名 | |
| 1 | 6月27日（月） 19:00-21:00 | オンライン | 2 | 実践紹介、学習支援のイメージ | 7 | 当事業アドバイザー | 山西優二、神吉宇一、矢崎理恵、矢部まゆみ | |
| 2 | 7月11日（月） 19:00-21:00 | オンライン | 2 | まちづくりと日本語学習支援の関係 | 5 | 当事業アドバイザー | 山西優二、神吉宇一、矢崎理恵、矢部まゆみ | |
| 3 | 7月25日（月） 19:00-21:00 | オンライン | 2 | 文化、多文化、多文化共生 | 6 | 当事業アドバイザー | 山西優二、矢崎理恵、矢部まゆみ | |
| 4 | 8月1日（月） 19:00-21:00 | オンライン | 2 | 日本語学習支援 （聴く・待つ、やさしい日本語、対話） | 5 | 当事業アドバイザー | 山西優二、矢崎理恵、矢部まゆみ | |
| 5 | 12月5日（月） 19:00-21:00 | オンライン | 2 | ふりかえり | 5 | 当事業アドバイザー | 山西優二、神吉宇一、矢崎理恵、矢部まゆみ | |

山梨県から研修講師候補者4名、行政職員2名、総括コーディネーター1名、CINGAからアドバイザー4名、CINGAコーディネーター3名で実践研究コミュニティを形成した。（国際交流協会職員は曜日の都合で参加できなかったため、録画を視聴）。

研究会では、地域づくりの観点から日本語学習支援者研修の目的を考えるとこころから始め、各自の実践経験や思いを共有しながら各回のテーマについて丁寧に議論を行なった。



実践研究コミュニティ第4回の様子

4.2. 評価（参加者アンケート結果）

プログラムに対する参加者評価：

「地域における学習支援者研修をつくっていく上で、この普及事業の取組は意義がありましたか」という問いに対し、「とてもあった」「まあまああった」という回答が合わせて85.7%であった。

アンケートコメント：

- CINGAの方々、県の職員の方々、コーディネーター、講師それぞれの立場から見えていたことをシェアしていただけたことで新しい視点を得、学ぶことができた。
- 支援が必要にもかかわらず手の届いていない人への対応、関係性構築（市・ネイティブ・移住者・外国につながる方）、今後のフォローアップなど、課題も見えてきた。
- 「日本語」を通して新しいネットワークが広がってよかった。
- 「異なる立場の方が関わり意見を出し合って、つくっていくことができた」「地域に住む方が講師をするのも大切なことだと思った。地元意識というか、共通の土台を持っている講師がいることで安心感や説得力が生まれたように思う」

4.2. 評価（評価委員コメント）

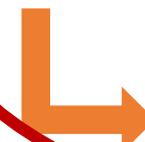
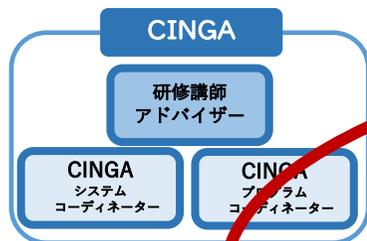
- 研修作りだけでなく、出口の教室をCINGAコーディネーター・アドバイザーが視察し、課題を共に検討することで、研修実施地SC/PCを支援できた。
- 講師候補者を発掘し、今後の現地の取組と一緒に考える人のネットワークをつくることができた。
- 講師・コーディネーターに新たな視点の獲得をもたらすことができた。
- 講師候補者は、研修実施地域において従来から「生活者」に関わる実践がある人や、地域日本語教育に強い関心と意欲を持つ大学教員であった。アンケートコメントから、同じ地域に、異なる立場で暮らす講師・コーディネーターが集い、学び合うことに意義が見いだせた。
- 一方、2ヶ月余りの期間に講師発掘、JKK実施、研修開始と続くスケジュールであったため、参加者にとって負担が大きかった感は否めない。
- 講師やコーディネーターの視点や意識の変容が見られ、今後の地域における取り組みの基盤となる可能性を感じることができ、単に日本語を教えるという枠組みから、地域づくりにおける日本語教育の実践につながる可能性がある。

5. 過年度の研修実施地域とのフォローアップ研究会と 全国関係者への報告会の実施

取組 d) その他の取り組み

5.1. フォローアップ研究会と報告会 1

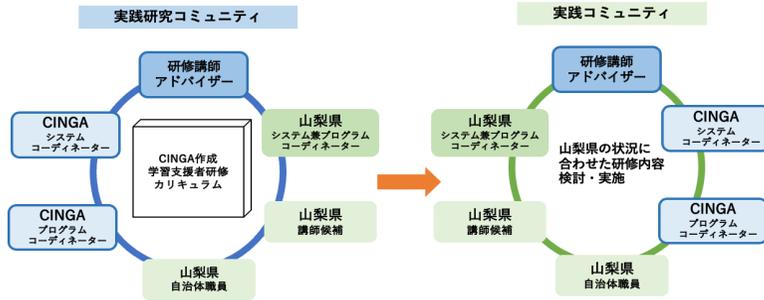
a) 研修体制・方法等の検討



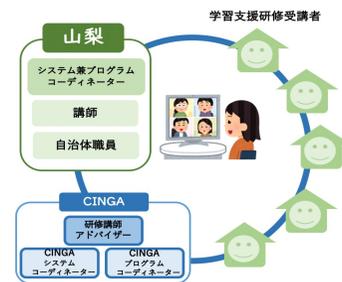
e) 事業評価



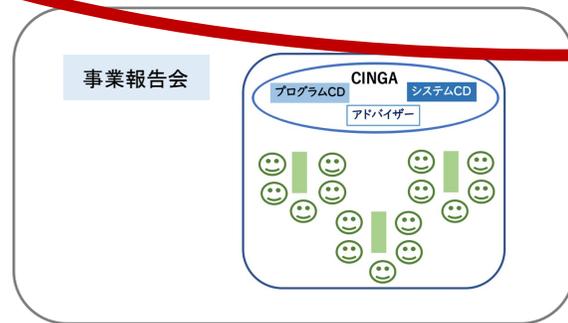
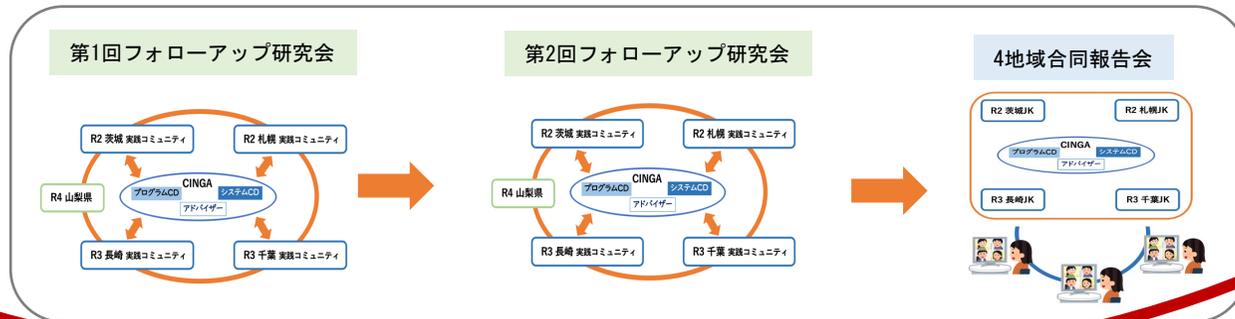
c) 研修講師・コーディネーターの育成



b) 研修プログラムの実施



d) その他の取組 過年度の研修実施地域とのフォローアップ研究会と 全国関係者への報告会の実施



5.1.1. フォローアップ研究会の目的・ねらい・特徴

【目的】

- 過年度の当プログラム研修実施地域の講師コーディネーターがふりかえりを行い、言語化して発表を行うことで、コーディネータの力量形成を図ること
- 各地域の学習支援者研修事業フォローアップを行い、さらなる事業発展に寄与すること

【特徴】

- 全国の体制づくり事業実施団体に向けた報告会での発表を目標として、そのプロセスにおいて普及事業参加年およびその後をふりかえり、言語化する機会としたこと。
- 体制づくりにおける客観的な状況変化ではなく、主に、コーディネーターとしての気持ちや考えの変化に意識を向ける問を立てて省察を支援したこと。
- 上記の支援を地域毎にアドバイザーがひとりずつつき、伴走支援したこと

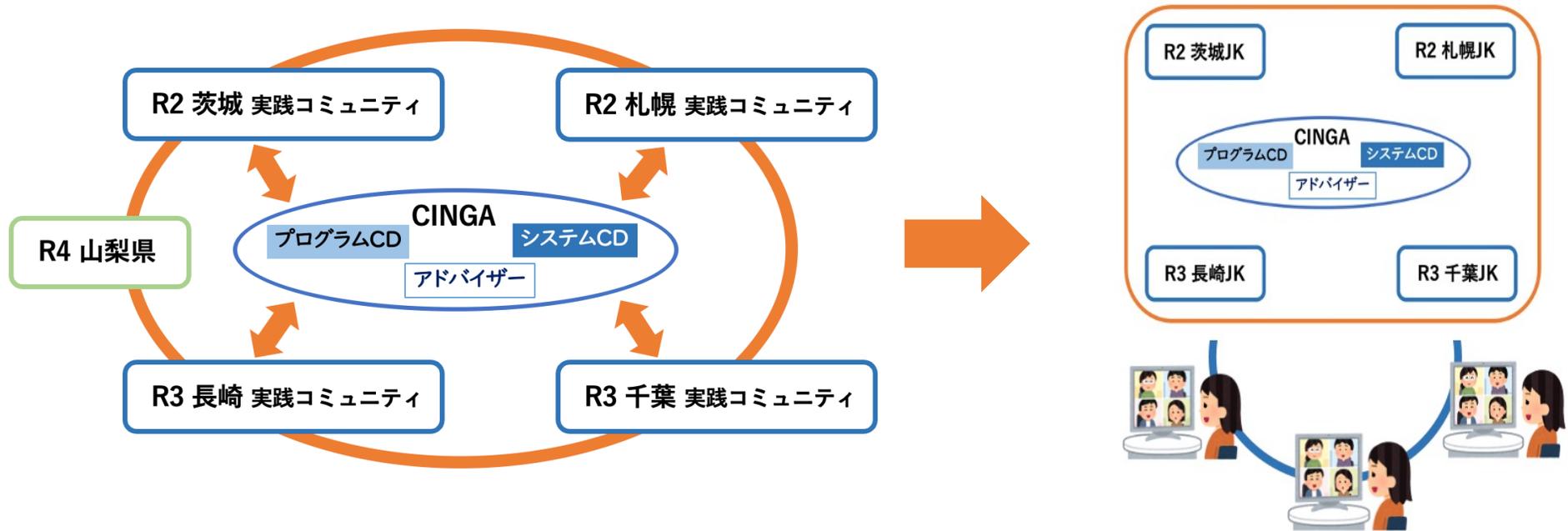
5.1.2. フォローアップ研究会概要

| 研修の名称 | 4地域合同フォローアップ研究会 | | | | | | | |
|-----------|---------------------------|-------|----|---------|------|---------------------|--------------------------|-------|
| 実施期間 | 2022年 7月4日～ 2022年 10月 24日 | | | | | | | |
| 開催場所 | オンライン | | | | | | | |
| 受講者数/応募者数 | 17人 | | | | 修了者数 | 17人 | | |
| 研修の実施内容 | | | | | | | | |
| 回数 | 開講日時 | 方法 | 時間 | 科目名 | 受講者数 | 講師（アドバイザー） 所属・役職 | | 補助者氏名 |
| | | | | | | 所属・役職 | 氏名 | |
| 1 | 7月4日（月） 19：00～21：00 | オンライン | 2 | 実践ふりかえり | 17 | 当事業アドバイザー | 山西優二、神吉宇一、 矢崎理恵、矢部まゆみ | |
| 2 | 9月26日（月） 19：00～21：00 | オンライン | 2 | 実践ふりかえり | 16 | 当事業アドバイザー | 山西優二、神吉宇一、 矢崎理恵、矢部まゆみ | |

| | |
|------|---|
| 参加対象 | <p>地域 R2参加 札幌市（札幌国際プラザ）、茨城県 R3参加 長崎県、千葉県</p> <p>研修実施におけるシステムコーディネーター、プログラムコーディネーター 行政職員、国際化協会職員等 CINGAアドバイザー、コーディネーター</p> |
| 内容 | <p>研修プログラム普及事業参加後の中長期的なふりかえり （その後の研修実施や日本語教育体制づくり推進の状況・コーディネーターとしての変化 についての言語化、アドバイザーを含めた関係者間の相互コメントや助言）</p> |

5.1.3. フォローアップ研究会実施体制

1) 令和2, 3年度事業参加4地域合同フォローアップ研究会、報告会1の実施



- R2,3事業参加地域（茨城県、札幌市、長崎県、千葉県）のコーディネーター等、実施関係者の力量形成、省察を目的とする研究会を2回行い、報告会実施につなげた。
- 研修アドバイザーが一人ずつ各地域を担当し、報告会発表に向けて支援を行った。

5.1.4. フォローアップ研究会の様子



フォローアップ研究会では、「4地域合同報告会」における事例報告をめざして、実践の省察をおこなった。具体的には、R2,3年度事業参加4地域が参加年度以降の研修実施や日本語教育体制づくり推進の状況、コーディネーターとしての自身の変化について言語化し、他の参加者と共有した。他地域の報告と、アドバイザーや他の参加者からの質問、コメント、助言を参考にして発表内容を深めた。

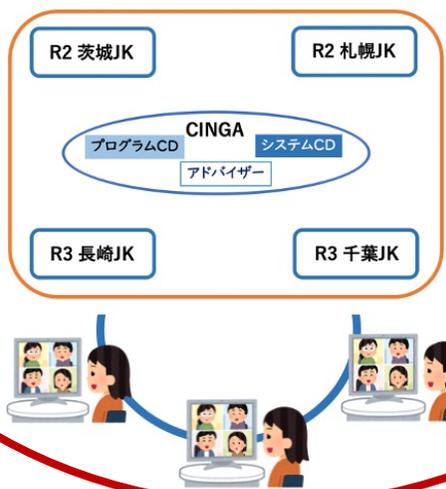
5.1.5. 報告会 I の実施 概要

【目的】

- ・本事業を全国の地域日本語学習支援者研修実施者に報告することで、事業の可視化・共有化を図ると共に、研修事業の更なる活性化に繋げ、結果として全国の関係者に利益をもたらすこと
- ・全国の地域担当者が当プログラム実践地域と意見交換をすることで全国的なネットワーク形成を目指すこと

報告会 1

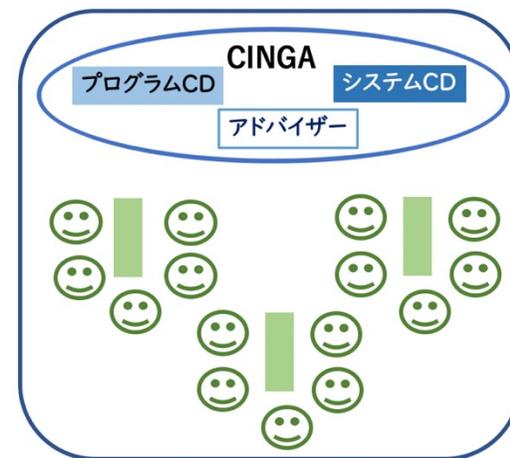
CINGA日本語学習支援者研修プログラム普及事業参加4地域
 合同報告会
 10月24日（月）13:30-16:30
 [オンライン] zoom
 参加者数 94名



全国の地域日本語教育関係団体や実践者に向けて、当事業参加4地域（茨城県、札幌市、千葉県、長崎県）のコーディネーターによる報告と地域別の質疑応答をおこなった。

報告会 2

「これからの地域日本語教育」5地域での「日本語学習支援者研修プログラム普及事業」から見てきたもの
 2月1日（木）13:30-16:00
 [対面] 会場 アーツ千代田3331
 参加者数 40名



3カ年の事業報告、および参加者と「これから」を考える報告会を対面で実施した。各地から地域日本語教育の実践者や行政担当者が参加し、情報交換と課題共有、熱いディスカッションをおこなった。

5.1.6. 報告会Iの様子

2022年10月24日（月）

文部省
令和4年度日本語教育人材の研修プログラム普及事業
**CINGA日本語学習支援者に対する
研修プログラム普及事業
参加4地域合同報告会**
特定非営利活動法人 国際活動市民中心 (CINGA)

報告会プログラム

第1部 13:30-15:45 zoom ウェビナー

1. CINGAより説明 (30分)
 - 報告会趣旨
 - 日本語学習支援者研修カリキュラム概要
 - 日本語学習支援者研修プログラム普及事業概要
 - 4地域の研修実施概要
2. 4地域報告 (60分)
 - 千葉→長崎→札幌→茨城
3. パネル質疑 (40分)

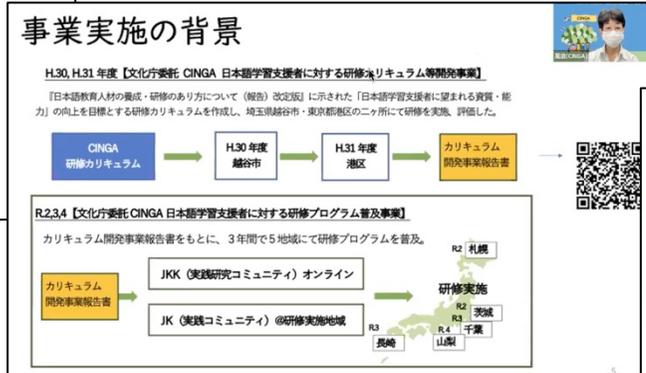
第2部 15:50-16:30
zoom ミーティング

地域別質疑

- Room 1 千葉
- Room 2 長崎
- Room 3 札幌
- Room 4 茨城

日本語学習支援者研修プログラム普及事業の意義：

研修実施に関わる人のつながりが生まれ、
実践コミュニティが形作られていくこと



4地域実施概要

| 地名 | 千葉 | 長崎 | 札幌 | 茨城 |
|-------------------|----------------------------|---------------------------|--------------------|----------------------------|
| 研修実施年 | R3 | R3 | R2 | R2 |
| 研修実施地 (主な対象地域) | 八街市 千葉県全域 | 長崎県全域 | 札幌市 | 下妻市 坂東市 |
| 研修実施形式 | オンライン | オンライン | オンライン | オンライン |
| 研修時間 | 3時間×5回 (各地域) | プレ企画 (1回×1時間) 1.5時間×5回 | 3時間×5回 | 3時間×5回 (各地域) |
| 修了者数 (受講者数) | 53名 (55名) | 26名 (30名) | 48名 (51名) | 36名 (41名) |
| 研修後の活動場所 | 基礎自治体国際交流協会 連団体 任意団体 | 任意団体 | 国際交流協会主催講座 任意団体 | 基礎自治体国際交流協会 連団体 任意団体 |

5.1.6. 報告会Iの様子

第1部 4 地域の報告

茨城

例) 自分たちのことばで話を

◆ 私たちが伝えたいのは

用語の定義じゃない!

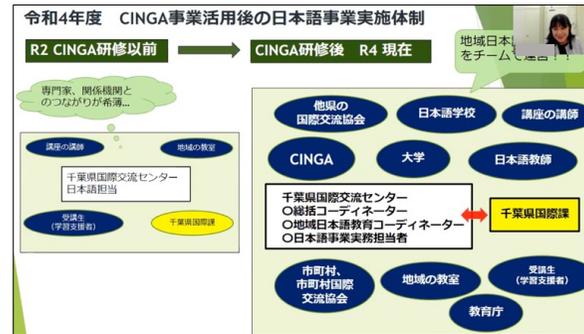
↓

対話

= 「おしゃべりは学び合い」

講師が実践している姿

千葉



札幌

3. 日本語事業 (令和2年度)

日本語学習支援者になるためのオンライン講座

期間: 令和2年11月8日~12月13日

(すべて日曜日午後) 3時間 × 5回

※初回のみ3.5時間

参加者: 51人、修了者: (4回以上出席) 48人

コーディネーター: プラザ職員

講師: 札幌で日本語教育・多文化共生に携わる方 (大学非常勤講師等) 3人

講師との協力関係の構築

日本語学習支援に関する市民の関心増

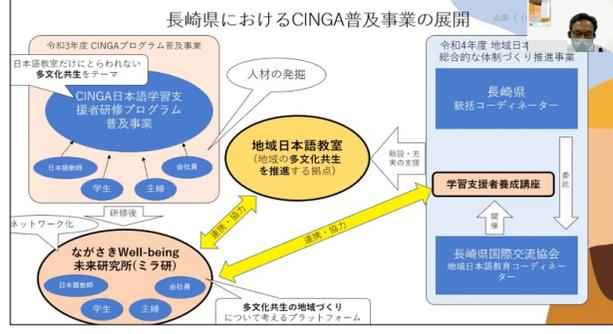
国際プラザ内の議論

ZOOM開催した日本語学習支援者になるためのオンライン講座

2020年11月8日、15日、22日、12月6日、13日

13:00~16:00 (1回3時間30分)

長崎



パネル質疑

第1部はウェビナーで報告を配信し、第2部はzoomミーティングで地域別に質疑応答を実施した

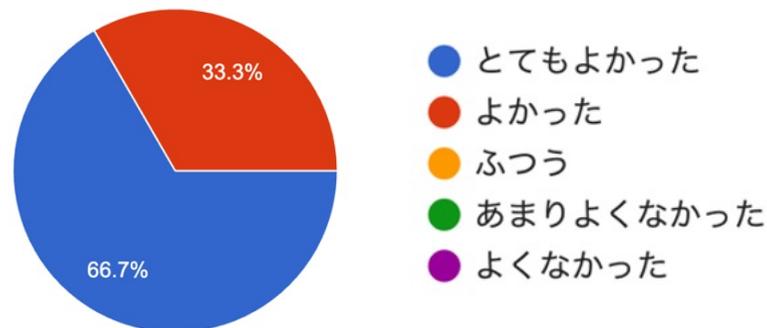


5.1.7. 報告会Iの評価

報告会1 参加者アンケート抜粋

1. 報告会第1部はいかがでしたか。

33件の回答



- 特に質疑応答で、表面的なことだけではなく悩むことの多いお話を聞くことができとても有意義だった。
- それぞれの地域での関係するところのネットワークの形や役割分担が少しずつ違うところが興味深い。事業をすすめるにあたって、それぞれの地域の状況に合わせる方法は手間がかかるようで、実は目標に早く近づけるのではないかと改めて考えさせられた。
- それぞれの地域の皆さんの良い関係性が感じられ、改めてチームづくり、関係づくりの大切さに気付かされた。地域の日本語教育に関わる人たちと、もっと対話をする時間を取らなければいけないと感じた。
- 同じカリキュラムを土台にしつつ、地域の特性に応じた養成講座が実施できることは、頭ではなんとなく理解していたつもりだったが、今日、実際の4地域の報告を伺って、実に特色のある実践が行われていることがわかり、大変勉強になった。実践研究コミュニティや実践コミュニティにおける対話やふりかえりによるものが大きいのだろうと思った。
- 「実に特色のある実践が行われていることがわかって大変勉強になった。実践研究コミュニティや実践コミュニティにおける対話やふりかえりによるものが大きいのだろう」

5.1.7. フォローアップ研究会と報告会Ⅰの評価

フォローアップ研究会・報告会1 登壇者アンケート抜粋

フォローアップ研究会と報告会に参加したことは、ご自身にとってどのような意味がありましたか。複数の観点から教えてください。

- 専門性をつけるために勉強になった。自分の自治体だけという狭い観点からの脱却。人との出会いなど、いろいろな意味がありました「これから」をみなさんと考えていくための振り返りの場でした。発表するまでにチーム内で話し合ったことで、ひとつひとつを確認していく感覚がありました。
- FU研究会では①他地域の方々と悩みが共有できたこと、報告会では②自分達の取り組みを発表するために何度も練り直したことが県内での説明にも生かされると成果に自信を持てるようになったことです。
- 県と市の違いを認識したほか、それぞれの団体の取組内容を知ることができ、その中で自分たちが取り組むことは何かが明確になったように思います。また、これまでの自分たちの団体が取り組んできたことや大切にしてきたことについて、言語化する中で思考も整理されたように思います。
- 他の地域のその後、特に“うまくいっていない部分”も知ることができたのは、今後の事業計画の策定と展開に活かせると思います。また、自身の昨年度からの活動を振り返り、初心に立ち返ることもできました。
- 自分達の取り組みを相対的に見つめ直す機会にもなりましたし、刺激にもなりました。

5.1.7. フォローアップ研究会と報告会Ⅰの評価

結果①

- 4 地域合同研究会・報告会をとおして、過去年度参加地域のコーディネーター等に中期的な実践ふりかえりの機会を提供し、育成に寄与した。過去年度普及事業コーディネーターは、フォローアップ研究会と報告会Ⅰをこれらのキーワードで捉えていた：「つながり」「ふりかえり」「継続性」「マイルストーン」「普及」「課題・悩みの共感」。
- 「実践の言語化によって、自身の地域の中で事業を説明する際にも役立った」という記述もあった。
- 同一カリキュラムをもとにそれぞれの地域がどのように研修を作っていたか、および、その後の展開を、全国で体制整備を推進する立場の人々に報告し、意見交換の機会とすることができた。
- 報告会アンケート回答によれば、87%以上の回答者が「自身の実践を行う上で参考になる点が大いにあった／あった」とした。
- 報告会の趣旨が多くの参加者に伝わった。
- 各地域のコーディネーターにとって、研究会と報告会への参加は肯定的に評価された部分が多いものの、一方で、本務の多忙な中、時間的に負担であったとのコメントもあった。

5.1.7. フォローアップ研究会と報告会Ⅰの評価

結果②

他地域に向けた事例報告の機会は日本語教育担当者研修や日本語教育大会等、今般多数あるが、それと異なる点を以下に挙げる。

- i. フォローアップ研究会においては、研究会メンバーは他地域からの参加者であっても同一カリキュラムをもとに研修作りを行ってきた、いわば「共通言語」を持つもの同士であった。そのため、同一のカリキュラムから地域の実情に合わせてどのような意図でどのようにカスタマイズして研修を実施したかなど、より実践的な部分を参考にすることができた。
- ii. 報告会へ向けてフォローアップ研究会において①で述べたように「共通言語」を持つ人と質疑応答を重ねながら自身の地域の実践の言語化を進めることができた。報告会では「共通言語」を持たない外部の人により伝わりやすく報告をする必要があった。研究会メンバーはその点も意識しながら他の参加地域の報告内容を聞き、自身の地域の報告内容を改善していくことができた。
- iii. アドバイザーによるアドバイジングの機会を設けたことにより、自身の地域の特徴や、他と比べてうまくいっている点など客観的な視点を得ることができた。

これらi～iiiを行うプロセスの中で実践を言語化していくことで、より深いふりかえりの機会となっていたことが、他の事例報告への参加と異なる点だと考える。

5.1.7. フォローアップ研究会と報告会Ⅰの評価

<コミュニティ形成・ネットワーク作りとしての意義>

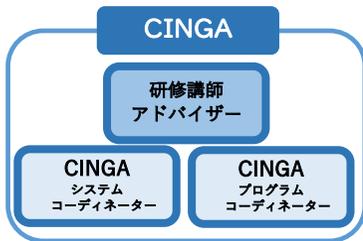
- 本事業の意義「研修実施に関わる人のつながりが生まれ、実践コミュニティが形作られていくこと」が、特に4地域合同報告会によって可視化された。
- 地域の違いから、経験年数の違いから、互いの成功体験から、苦悩から学び合える共同体が形成されネットワークが広がり仲間意識の醸成にも有効だった。
- 各実施時の取り組みの様子がわかりやすく報告され、第三者にも理解できる内容だった。プレゼン資料を作成する過程で、関係者間のコミュニケーションが活発になされ、事業の成果と課題について共通理解が図られた。また、4つの地域の報告を互いに聞き合う中で、実り多い学び合いの機会になった。

<現状把握の場としての意義>

- 各地域の関係者がフォローアップのために改めて情報交換や対話を行った事はとても良い取り組みだった。CINGA研修で取り組んだことの何ができていて何ができていないか、それはなぜか、どうすれば解決できそうかなど、改めて整理することで、現状と課題の洗い出しができ、今後のさらなる改善へとつながる見通しが持てた。
- 実施団体の方が思考のプロセスを含めて思いを生き生きと語ったことで、域内での実践コミュニティの形成の様子とその意義が、よく見えた。報告会を通じて、この授業に取り組んだことへの関係者自身の達成感が伝わってきた。
- 現場を持つ各地域での実践者は、自分の地域での参考にするために参加したと推察でき、今後、具体的な行動として波及することが期待できると思われる。

5.2. 報告会 2

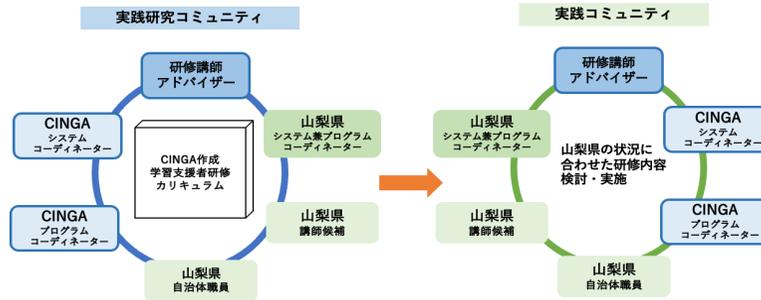
a) 研修体制・方法等の検討



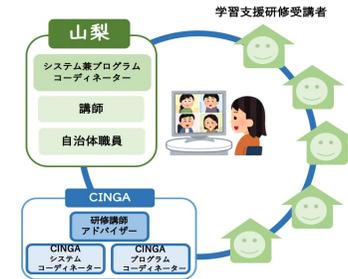
e) 事業評価



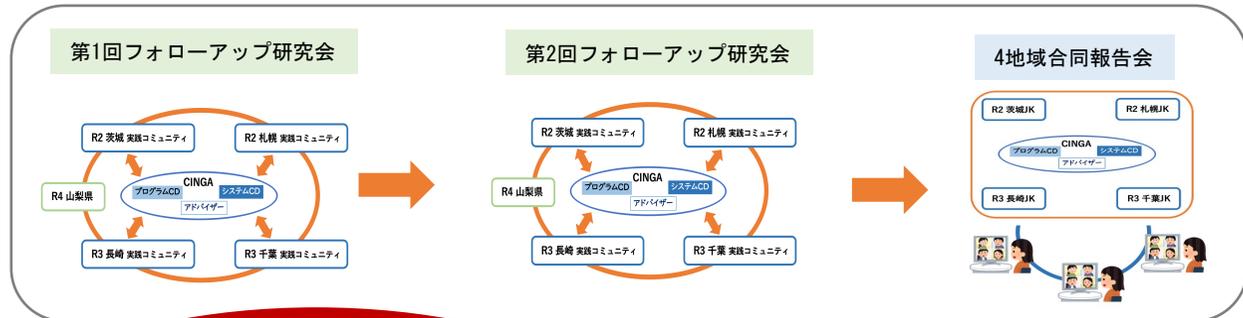
c) 研修講師・コーディネーターの育成



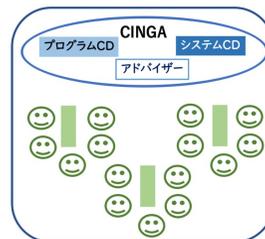
b) 研修プログラムの実施



d) その他の取組_過年度の研修実施地域とのフォローアップ研究会と全国関係者への報告会の実施



事業報告会



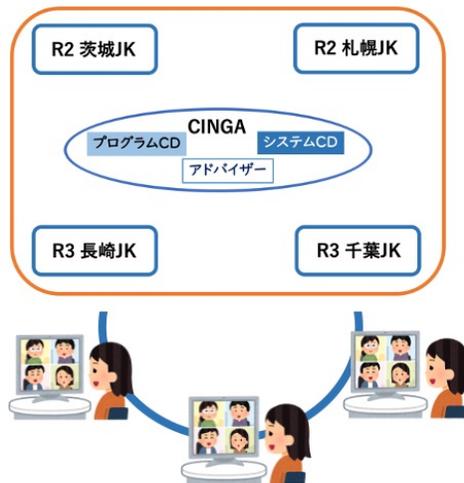
5.2.1. 報告会2の実施 概要

【目的】（再掲）

- ・本事業を全国の地域日本語学習支援者研修実施者に報告することで、事業の可視化・共有化を図ると共に、研修事業の更なる活性化に繋げ、結果として全国の関係者に利益をもたらすこと
- ・全国の地域担当者が当プログラム実践地域と意見交換をすることで全国的なネットワーク形成を目指すこと

報告会 1

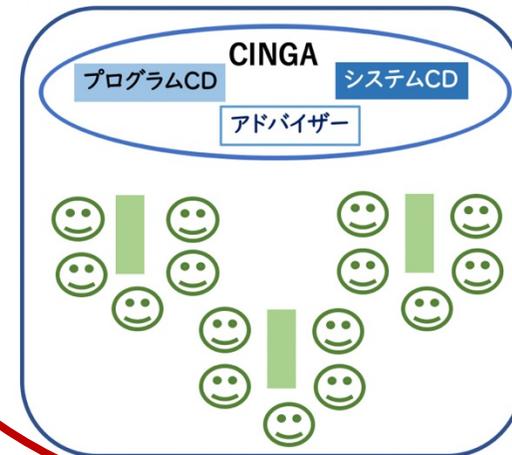
CINGA日本語学習支援者研修プログラム普及事業参加4地域
合同報告会
10月24日（月）13:30-16:30
[オンライン] zoom
参加者数 94名



全国の地域日本語教育関係団体や実践者に向けて、当事業参加4地域（茨城県、札幌市、千葉県、長崎県）のコーディネーターによる報告と地域別の質疑応答をおこなった。

報告会 2

—これからの地域日本語教育—
5地域での「日本語学習支援者研修プログラム普及事業」から
見えてきたもの
2月1日（木）13:30-16:00
[対面] 会場 アーツ千代田3331
参加者数 40名

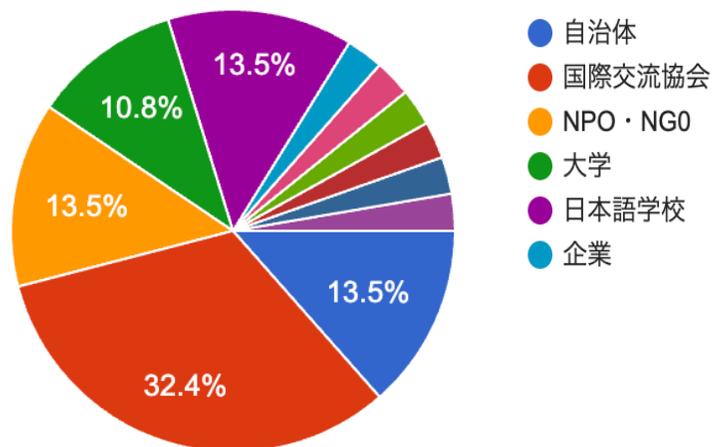


3カ年の事業報告、および参加者と「これから」を考える報告会を対面で実施した。各地から地域日本語教育の実践者や行政担当者が参加し、情報交換と課題共有、熱いディスカッションをおこなった。

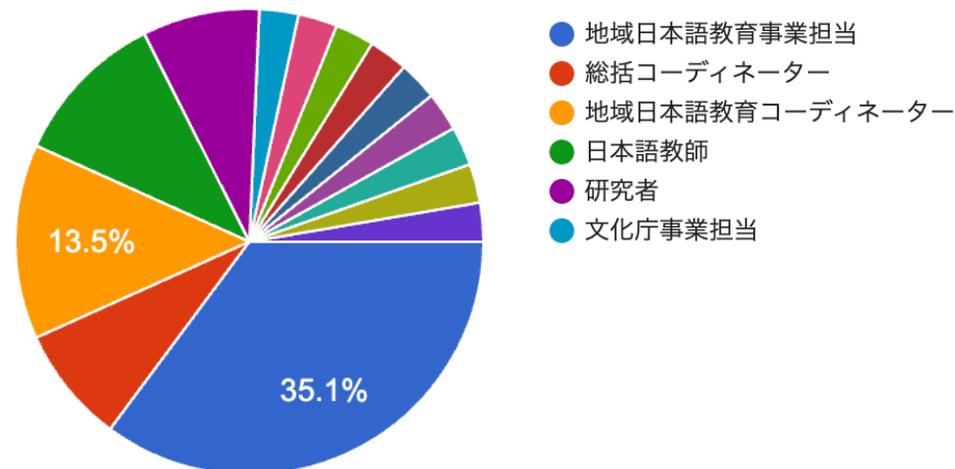
5.2.1. 報告会2の実施 概要

| | | | |
|---|---|------|--|
| 名称 | 報告会2 「これからの地域日本語教育を考える」 ～5地域での日本語学習支援者研修プログラム普及事業から見てきたもの～ | | |
| 日時 | 20223年2月1日 13:30-16:30 | | |
| 場所 | アーツ千代田3331 | | |
| 参加者数 | 41人 | 参加対象 | 地域日本語教育事業を実施中または実施予定の行政担当者、国際交流協会職員、総括コーディネーター、地域日本語教育コーディネーター、日本語教師、地域日本語教育研究者、地域日本語教育に関わる機関職員等 |
| ※ 報告会は、「CINGAと多文化共生を考える1日」のプログラムの一部として実施した。 | | | |

参加者の所属



参加者の役割



5.2.1. 報告会2の実施 概要

CINGA事業報告会 Part2 対面開催! *オンライン配信なし
2023年2月1日(水) 13:30-16:30

CINGA

体制づくりは
チームづくりから!

対話の場と基礎的な
日本語教育の場、
両方作れる?

多文化共生と
日本語学習支援を
どうつなげる?

ふりかえりから学ぶ
デザインを!

—これからの地域日本語教育—

5地域での「日本語学習支援者研修プログラム普及事業」から見えてきたもの

CINGAは、2018年から日本語学習支援者研修のカリキュラム開発を行いました。その後、5つの地域において研修づくりに伴走しました。計5年間の取組から見えてきているものを、事業コーディネーターと個性豊かな委員たちが語ります。そして、それを今後の地域日本語教育にどう活かしていくのか、ディスカッションをとおして皆さんと考えます。

1. 報告：5地域との関わりから見えた成果と課題
2. パネルトーク：「今、見えてきているものは？」
3. フロアディスカッション

場所 3331 Arts Chiyoda JR御徒町徒歩7分

定員 50名 事前申込み必須

〆切 2023年1月20日(金) 定員になり次第、〆切

費用 無料

対象 地域日本語教育事業を実施中または実施予定の行政担当者、国際交流協会職員、総括コーディネーター、地域日本語教育コーディネーター、日本語教師、地域日本語教育研究者、地域日本語教育に関わる機関職員等

問合せ・連絡先

email cinganihongo21@cinga.or.jp TEL 03-6261-6225 <http://www.cinga.or.jp>

特定非営利活動法人 国際活動市民中心 (CINGA) 担当：新居、萬浪、西山

 令和4年度 日本語教育人材の研修プログラム普及事業

参加者の地域：

北海道、新潟県、群馬県、富山県

東京都、神奈川県、千葉県、茨城県、

山梨県、静岡県、愛知県、大阪府

福岡県

5.2.2. 報告会2の様子

5地域での「日本語学習支援者研修プログラム普及事業」から見てきたもの

報告会プログラム

1. 事業報告 (30分)
「5地域との関わりから見えた成果と課題」
2. パネルトーク (30分)
「今、見えてきているものは？」
3. 休憩 (懇談の時間) (20分)
4. フロアディスカッション (85分)
5. おわりに (15分)



事業報告



アドバイザーによるパネルトーク



フロアディスカッション



ディスカッション用の小物



各自の問題意識と気づいたこと



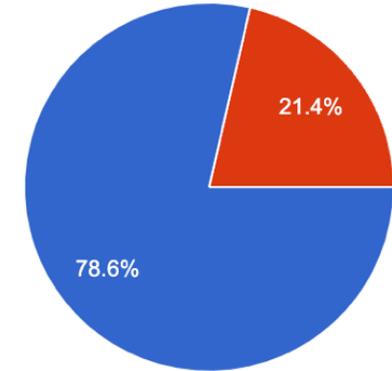
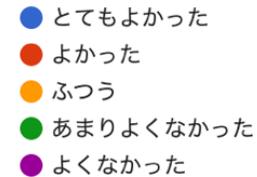
新たな「実践コミュニティ」の始まり

5.2.3. 報告会2の評価（参加者アンケート結果）

報告会2 5地域での「日本語学習支援者研修プログラム普及事業」から見てきたもの

1. 本日CINGA事業報告会はいかがでしたか。

28件の回答



よかった点（アンケートコメント抜粋）

- 多様な人が対面で参加し、終始熱い議論が交わされた
- 多様な立場、所属の方と同じテーマで話し、考えや視点が広がった
- 自身の課題に気づけた
- 録画（報告会1）の学び、現場での悩み、報告会での学びで今後のヒントが得られた
- 参加者の取組や課題を共有しながら、全体としての現在地を共有できた
- タイムリーな問題をディスカッションで話し合えた
- （録画や報告で）ある程度の理解をした上で対話に参加できた
- 各プログラムへの参加の仕方に工夫があり、あっという間に時間が過ぎた。それぞれのテーブルで活発な意見交換ができ、横のつながりができたこと。

5.2.3. 報告会2の評価（参加者アンケート結果）

5地域での「日本語学習支援者研修プログラム普及事業」から見えてきたもの

これから地域日本語教育を推進していく上で役立った点

- ネットワークづくり
- 対話
- 他地域の状況を知ること
- 外国人との協働
- 全体を多面的、多角的に捉えること
- 基礎日本語教室と交流型の両輪
- 行政としてのファンディングの必要性
- それぞれの課題や悩みが聞けたこと。
- 議論を重ねることの重要性を知ったこと
- 人とつながり、人を巻き込んでいく。その過程こそが事業を推進していく力なのだ気付けたこと
- プログラムや運営方法

5.2.3. 報告会2の評価（CINGAコーディネーターコメント）

- CINGAの日本語学習支援者研修プログラム普及事業3年間（遡っては、カリキュラム開発事業からの合計5年間）を通して得られた成果と課題を踏まえた上で、「報告」に終始せず、これからの地域日本語教育について全国各地の関係者が対話し、今後を描き出そうとする未来志向の場をつくることができた。システムコーディネーターとしては、この事業の最終回をどうしても対面での対話型にしたかった。それは、この普及事業の組み立てすべてが「コミュニティにおける対話」という「手段」を用いてきたから、最後までそれが大切と考えたためである。
- CINGAは、日本語学習支援者研修プログラム普及事業の意義を「研修実施に関わる人のつながりが生まれ、実践コミュニティが形作られていくこと」とした。事業報告会はまさに「つながり」と「実践コミュニティ」の形成の場となり、また、その重要性をひとりひとりが強く認識する場となった。3年間の事業をこうした形で締め、未来につなげることができたことは大きな成果と考える。このつながりとコミュニティを絶やすことなく、今後も分野の関係者により、「参加→協働→創造」のサイクルを維持発展させていかなければならない。

5.2.3. 報告会2の評価（事業評価委員コメント）

<場の雰囲気>

- 熱いエネルギーが充満しており、前向きな気分になる楽しい報告会であった。
- 報告会の充実ぶりが、事業成果そのものである。
- 創出された雰囲気の良さは、地域を超えた横のつながりを形成することに有為に働いた。

<学びの場>

- 対面で、対話を重視する形で実現できたことに大きな意義があったと思う。まさに「実践研究コミュニティ(JKK)」拡大版として、「対話を通して対話的な社会(コミュニティ)をつくる」という軸がリアルな感覚をもって共有された感触があった。
- 過去を含めた事業全体を公開で振り返る場を設けたことは、実施当事者の振り返り、関心層の新たな気づき学び、ネットワークの形成につながった。

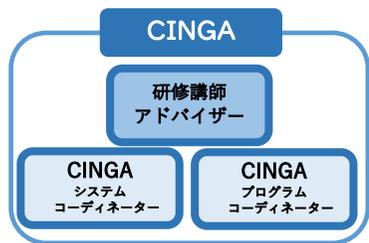
<今後への期待>

- これを出発点に、各地で検討されている具值的な教室の設計、プログラムの内容・実践を共有しながら対話して考えていく協働実践研究の場が発展していくとよいと思う。
- 行政の方と協会の方とコーディネーターが時間をかけて地域住民のために力を注いでいる事は、報告を聞いた方々にも大きな刺激と勇気を与えたものと思う。また他者への発信は、発信する側の仲間意識を醸成する効果があることを実感する。4地域合同報告会、0201報告会を経て、「仲間」ができたと感じた地域の実践者は多くいたことと思う。そのことが、これからもそれぞれの立場での取り組みを継続していこうと言う原動力になるのではないだろうか。
- 地域で活動している「孤独感」や「ネットワークの形成」などが多く聞かれた。地域によっては、長年孤軍奮闘してきたプレイヤーも多い中で、地域を超えたつながりの創出は、取り組みを持続可能にしていくためには不可欠な要素であると感じた。報告会の参加者のように、仲間やネットワークに対して餓えている、欲している者たちをつなぎあわせ、持続可能な枠組みを形成していくことは、今後とても期待されるであろう。

6. 事業評価

取組 e)

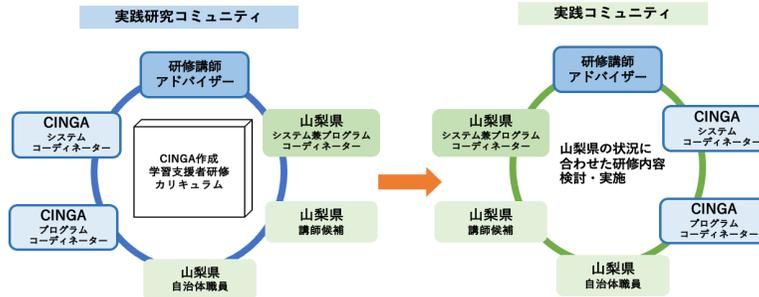
a) 研修体制・方法等の検討



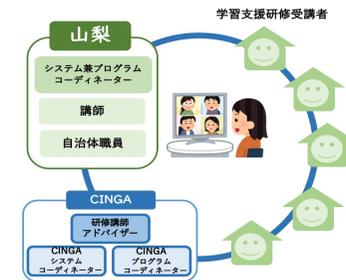
e) 事業評価



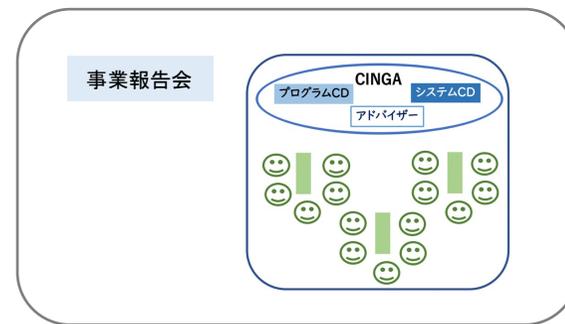
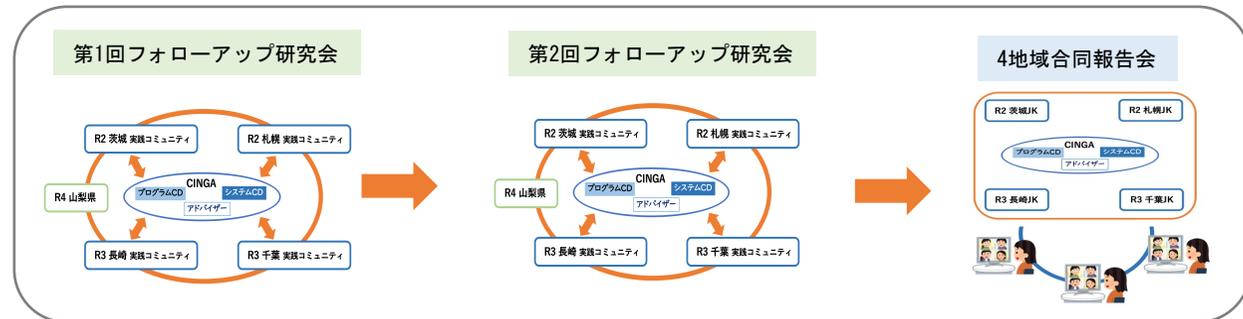
c) 研修講師・コーディネーターの育成



b) 研修プログラムの実施



d) その他の取組_過年度の研修実施地域とのフォローアップ研究会と全国関係者への報告会の実施



6.1. 事業評価概要（評価の観点及び検証方法）

評価の観点：

各取組の実施結果をもとに、事業全体として、他地域の日本語学習支援者研修実施に資する成果と課題が得られているか。

【検証方法】

- ① 研修実施地システム兼プログラムコーディネーターが研修データをもとに評価を実施。
- ② CINGAシステムおよびプログラムコーディネーターが①および「講師・コーディネーターの育成」「報告会実施」についてアンケートやふりかえりデータを分析し、評価を実施。
- ③ 検討委員兼評価委員は②の分析・評価に基づき、事業評価を実施。
- ④ 外部評価委員は③の評価および評価委員会における情報に基づいて事業評価を実施。

（データに基づく各取組の評価は取組の評価スライドに掲載）

6.1. 事業評価概要（検証結果）

a) 研修体制・方法等の検討（根拠は取組スライドを参照）

R4のポイント（前年度の課題に対する対応）：

- 「年度や地域を超えた「循環」を促進する場の設置」として2回の報告会を実施。
→ 研修実施当時者のふりかえりの場、関心層の学びの場、ネットワーク形成の場として、年度や地域を超えた「循環」の重要性を証明できた。
- 「体制整備事業における研修づくりの位置付けの明確化」が可能な地域における研修プログラム実施。
→ 研修の位置付けの明確さが、研修参加者の参加意欲を高めた。また、研修実施者にとっては、実際の「教室活動」と「研修実施」との循環にもつながることが明らかになった。

b) 研修プログラムの実施

- 研修実施地である山梨県では、研修参加者の出口である4つの地域が合同で参加するオンライン研修を実施した。研修実施地コーディネーターの評価から、本研修プログラム実施が、研修の目的である「相手のことばや文化を尊重し、対等な立場で接する」「住民相互の協力による地域づくり、異なる考えや価値観を持つ他者との協働」ができるパートナーの形成に貢献できたことがわかった。

6.1. 事業評価概要（検証結果）

c) 研修講師・コーディネーターの育成

- 「多文化共生のまちづくりのための日本語学習支援」という理念と実践を普及できる講師を5名以上、地域のニーズに基づき日本語学習支援者育成研修をコーディネートできる人材を1名以上育成支援する、という数値目標を達成した。
- 実践研究コミュニティ、実践コミュニティ、日本語学習支援者研修の3つの取り組みが相互に関連しつつ、研修担当講師・コーディネーター育成に有効に機能した。

d) 過年度の研修実施地域とのフォローアップ研究会と全国関係者への報告会の実施

- 4地域合同研究会・報告会をとおして、過去年度参加地域のコーディネーター等に中期的な実践ふりかえりの機会を提供し、育成に寄与した。また、2回の報告会は、いずれも参加者の高い満足度を得た。

7. 成果と課題

7. 成果と課題

成果

<対話による場作り・仕組み作り>

- 「実践コミュニティ」、複数の実施地の関係者をネットワークしての「実践研究コミュニティ」、CINGA(SC、PC)・アドバイザーによる「伴走支援」、と言う3つの仕組みが相乗効果を発揮したことで、CINGAが開発したプログラムの設計思想の普及と、各地の実施者の力量形成が成し遂げられた。フォローアップ研究会・4地域合同発表会が功を奏したのも、上記の3つの土台があったからだと思われる。
- 対話を通じて実践知を共有・発展させる実践コミュニティの重要性が改めて浮き彫りになった。
- 成果の要因は、地域での体制づくりを最も重視したこと／毎年アプローチを変え、様々なモデルケースの開発に果敢にチャレンジしたこと／関係者の合意形成と意識付けに対話を重ねたこと／フィードバックや内省を大事にしたこと／中長期的な視点でフォローアップや学び合いの機会を創出したこと。
- 4地域合同研究会・報告会に見られるように、限られた4地域とは言え、CINGAコーディネーターが研修実施を通じてそれぞれの地域と深く真摯に関わる姿勢を貫いてきたことにより、実践研究コミュニティと実践コミュニティの「循環」、年度や地域を越えての「循環」の重要性を証明することができた。

<「多文化共生・文化理解」と「地域日本語教育」との関連づけ>

- 「多文化共生・文化理解」と「地域日本語教育」との関連について、5カ所の地域の事例からいくつかの関連付け方法があることが学べた。

7. 成果と課題

成果

<事業全体の取組構成>

- 実践研究コミュニティと実践コミュニティの「循環」、年度や地域を超えての「循環」の重要性を証明することができた。
- 実践研究コミュニティ、実践コミュニティ、日本語学習支援者研修の3つの取り組みが、相互に関連しつつ、研修担当講師・コーディネーター育成に有効に機能した。
- 過去を含めた事業全体を公開で振り返る場を設けたことは、実施当事者のふりかえり、関心層の新たな気づき学び、ネットワークの形成につながった。

<理念の共有>

- 支援者研修において「多文化共生のまちづくりのための日本語教室」「対等な対話者としての支援者」という考え方を共有することが大切であった。CINGAカリキュラムを地域に合わせてカスタマイズしながらも、共通して伝えられていた軸がこの部分であった。
- CINGAの取組は、まさに思想としての対話型である。自律性や対話（他者との対話と自己内対話＝ふりかえり）を重視した研修体制が生まれ、創発へとつながっていた。

<波及効果>

- 本事業参加地域以外にもCINGAモデルをベースにした学習支援者研修を実施した地域があり、本事業での取り組みが波及していた。

7. 成果と課題

課題 (今後取り組むべきこと)

<研修実施の仕組みづくり>

- 本事業同様の丁寧な研修体制を他団体・組織がどのように作り出せるか。
- CINGAのような外部団体の伴走なしに対話的な活動による事業実施の手法が定着するか。対話は時間がかかるため、対価のある仕事と位置づけるのは難しいかもしれない。

<講師発掘>

- 対話によって関係者とともに研修を作りあげる意欲がある講師を見つけること。
- 実践研究コミュニティと実践コミュニティの質的関連、具体的な教室設計、プログラムの内容・実践を共有しながら考えていく協働実践研究の場をつくること。

<地域を越えたネットワークづくり>

- 報告会の参加者のように、仲間やネットワークを欲している者たちをつなぎ、持続可能な枠組みを形成していくこと。

<今後の研修講師育成プログラムの内容>

- なぜ、どのような「日本語学習支援者」が必要か。何のために日本語教育を行うのかという根幹になる価値をしっかりと考え、根っこの部分がブレない人たちを今後も育てること（2022年度は、各地で文化審議会国語分科会の発表した「B1レベル」に引っ張られ、悩む声が聞かれた。）
- 文化からのアプローチによって、地域住民をより広く多文化共生の文脈に参加してもらうこと。地域日本語教育をより生かしていくことにつながるため。

8. 3年間の事業をとおして見えたこと

8. 3年間の事業をとおして見えたこと

本事業は、文化庁「日本語教育人材の研修プログラム普及事業」としてCINGAが実施した事業の3年目であった。ここに、3年間の事業をとおして見えたことをまとめる。

3年間の事業の概要

参加地域： R2 札幌市（札幌国際プラザ）、茨城県

R3 長崎県、千葉県

R4 山梨県

- 実施内容：
- ・各参加地域における日本語学習支援者研修の実施（R2,3,4）
 - ・研修実施に先立つ実践研究コミュニティおよび実践コミュニティの形成（R2,3,4）
→日本語学習支援者研修実施関係者による学び合いおよび研修実施体制構築
（※R3は実践研究コミュニティに兵庫県コーディネーターがオブザーバー参加）
 - ・R2,3参加地域による合同研究会と報告会（R4）

8. 3年間の事業をとおして見えたこと

<まちづくりに資する地域日本語教育に必要なもの>

- 「良い地域」「良いまち」をつくるために、そこに暮らす全ての人が必要な存在で、地域日本語教育はそのまちづくりに大きく貢献しうる力をもった何かだということが見えた。時間、伴走者、何より仲間が必要。
- 報告会2のような形でネットワークを作れるとよい。政策が進む中、予算や仕組みはうまく利用しつつ、地域日本語教育の自律・自立を目指して、ネットワーキングによる事例共有とボトムアップの政策への影響力をつけていけるとよい。

<対話の重要性>

- 本事業の各取組は「対話を通して対話的な社会(コミュニティ)をつくる」ことの重層的な連鎖であった。

<専門職の配置>

- 研修と教室活動を長期的にPDCAサイクルで動かしていくためには、教室活動を実際に行うこともできるコーディネーター兼日本語教師が継続的・安定的に任用される環境が必要である。

<時代の変化に伴う更新>

- 3年間で周囲の状況が変わった。特に政策が進み、従来は想定していなかった時間数や予算、到達レベルなどが地域日本語教育にもたらされるようになりつつある。3年間の事業で見えたことは、状況変化以前の実態に合わせた支援者研修であり、その成果は十分に見えた。今後は政策が進む中で、支援者研修はどうあるべきか、発展的な検討が必要である。